

# 俺のダンジョンクラフト INロキファミリア

やってられないんだぜい

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

毎日マイクラに明け暮れていた男は、いつの間にかセーブもせず寝落ちしてしまった。そんな彼を目を覚ますと直ぐに自分を目を疑った。マンションに住んでいた筈の自分が、木造の小屋のボロボロのベットで目を覚ましたからだ。

とりあえず外に出る。すると、またもや自分の目を疑った。今度は尻もちも付いた。小屋の外に巨大な塀に覆われた都市があったのだ。絶望した。ここはあの残酷な進撃の○人の世界なのだ。しかし、直ぐに誤解は解け、この世界がダンまちの世界なのだと知った。

これはダンまちについて名前しか知らないマイクラフターが時に戦い、時に鉱石を求め、時に喧嘩し、時に恋愛し、時にふざけ、最後に全てを無に帰す物語である。

## ―追記―

申し訳ありません。本作は諸事情により投稿を停止させてもらいます。理由は様々なのですが、リアルが忙しくなる事、投稿意欲が薄れた事が主な理由です。

ただ、完全にこの作品を止める訳ではありません。性格や設定を多少変更し、NEWステイプとして帰ってくるつもりですのでその時はどうぞよろしく願います。

## 目次

|                           |    |
|---------------------------|----|
| マインクラフターステイプ              | 1  |
| 異世界転生                     | 4  |
| 世界の名前                     | 8  |
| ルールの違い                    | 13 |
| Oh My God                 | 19 |
| 田舎もん                      | 23 |
| ロキファミアリア会議                | 27 |
| 筋肉モリモリマッチョマンの変態           | 32 |
| 入団試験                      | 39 |
| 半月ぶりの○○○                  | 45 |
| 命懸けの戦いに正々堂々なんて言葉は存在しない    | 50 |
| 悪魔の証明                     | 55 |
| 最終試験&結果発表                 | 60 |
| 挨拶                        | 68 |
| ○女子怖い                     | 72 |
| 焦り                        | 77 |
| 勉強って聞くだけで頭痛くなる            | 83 |
| 日にち空けてから投稿すると高確率で低評価食らうよね | 87 |

## マインクラフターステイープ

「盾構ええ——!!?」

ロキファミアリアは現在49階層に遠征に来ていた。これまで順調に進めて来た彼等だが、現在100体はいるであろうモンスターの大群による猛攻に苦しんでいた。

フィンが団員を鼓舞する。『この大群を足止めしろ』と。我らはモンスターを無理に倒す必要は無い。耐えれば良いのだ。この防衛ラインを突破させなければオラリオ最強の魔道士による一撃によって我々の勝利が確定するのだから。

(というものの、この大群は止めるだけでも骨が折れるな。呪文の詠唱はまだか?)

団長のフィンはリヴェリアを見る。彼女はこの大群を一層する魔法の詠唱をしている。しかし、威力の高い魔法はそれ相応の詠唱を必要とする。この様子では魔法発動まで3分はかかりそうだった。

「ぐわあ!!?」

「?!」

不幸な事に、盾部隊の1人の盾が消耗により碎け散った。まるでそれに連鎖する様に次から次へと碎け散る武器。この遠征で戦闘回数が少ないと武器の修理を怠ったからだ。それだけでない。戦いの疲労は武器だけで無く、人も同じだ。もう少しで休憩しようしたところでのこの大群に出会し、メンバーの疲労はピークに達している。

「やむを得ない。ステイープ!武器の補充とメンバーに回復の※スプラッシュポーションを!!?」

※スプラッシュポーション。液体が瓶に入っている。何かしらの方法で瓶を割り、液体が空気に触れさせる事で気化させ、気化したポーションの空気を体内に取り組む事で効果を発揮する。範囲直径5m程。

フィンはある男の名を呼ぶ。その名は『ステイープ』。その者はこの深層の場には相応しく無いレベル1の冒険者である。冒険者歴2ヶ月前の新米冒険者だ。そんな冒険者をこの深層に連れてくるの

は生身でマグマに飛び込めと言っている様なもの。それだけでない。部下を守るのは幹部の役目。足手まといを連れてくれば、それだけその人物を守る事に神経を注ぎ、注意力が散漫になる。

それでも連れて来た理由は何故か？レベルは1でも深層のモンスター相手に勝つ事が出来る天賦の才の持ち主？違う。

今は未熟でも将来有望株な新人でこの戦いを見せるだけでも彼の財産となり、大きく成長させられるから？違う。

答えは、彼はロキファミアリアにとって必要不可欠なサポーターなのだ。それも、この大所帯のファミリアの遠征でも、彼1人さえいれば事足りるといえる程の。

しかも、彼が凄いのはそれだけでない。なんでも出来るのだ。武器、防具の製作。ポーションの製作。地図の作成。ポーションの製作は専用の装置と素材を必要とする為、おいそれとダンジョンで造る事は出来ないが、防具や武器は違う。その場で作れるのだ。工房なんて必要無い。テーブルと素材さえあれば数秒で製作可能なのだ。しかも適当に作った不良品は存在しない。全てが一流の出来栄え。多少制約はあるが鍛冶師涙目の能力だ。他にも戦闘や探索に必要な無くても、生活する上で必ず役に立つ能力を山ほど持っている。

そして先程述べた様に、そんな彼に戦いの才は無い。剣術は素人同然だ。剣を握ってまだ2ヶ月なので当たり前と言えば当たり前だ。だが、だからといって戦えない訳では無い。彼の能力を全活用すれば、例えばレベル1でも深層のモンスター相手に勝つ事も可能なのだ。つまり、彼は新米サポーターの顔を持ちながら、深層で戦う力を持った人物でもあるのだ。（今回、フィンに呼ばれたのはサポーターとしてだが）

「……？ステイブ！どうした！聞こえないのか！」

「団長！」

「なんだラウル！」

「す、すいません。ですがあれを！」

しかしフィンの声に反応するステイブの声は無かった。代わり

にフィンに駆け寄って来たのはラウルだった。フィンは非常事態にステイブが反応しない事と、反応したのが彼では無かった事に若干声を荒げる。ラウルはフィンに一言謝罪すると、戦闘から少し離れた位置を指差した。フィンはラウルが指差す方向を見る。するとそこには大量の盾と回復のスプラッシュポーションが置かれていたのだ。

「なんであそこに?!あれはステイブが収納していた筈……まさか?!」

「団長、それとこれも」

「何?………ステイブ、後で覚えておけ」

「ひっ」

ラウルから受け取ったステイブからの書き置きを見たフィンはとてつもなく怒りに満ちていた。

『盾と回復のスプラッシュポーションは一応出しときました。自分  
は新たな道具製作の為、近場にダイヤが無いか探してきます』

p.s. 魔石は後で拾うので許してね。俺だってブランチマイニング  
したいんだから』

一方、当の本人はというと……

「チクショー!折角命懸けでこんな階層までついて来たって言うのに  
ダイヤのダの字もねーぞ!!何処もかしこも銅や石炭ばかりじゃ  
ねーか!!!!これじゃいつまで経ってもダイヤ全装備も作れないじゃ  
ねーか!!!!このシード値どーなってやがんだ——————コンチキ  
ショー!!!!!!」

## 異世界転生

「今日もマイクラやるか。今日やるのはズバリ!『直下掘り』だ!ブランチマイニングなんてものは甘えなのだよ。マグマダイブ?空洞にぶち当たったの落下死?全ロス?関係無いね。そんな事言う奴に一言言っただけ。『ならお前は負けないゲームをして楽しいのか?』つと。確かにブランチマイニングすれば基本死なないだろう。しかしそこに楽しさはあるのか?少なくとも俺はつまらない。ゲームの中でくらいリスクを背負え。……………ふっ、決まったな」

こんな恥ずかしい独り言を夜中の暗い部屋で喋ってる俺の名前は玄亥夢好霧終。凄い名前だろ。こんな苗字も名前も日本中探しても何処にもいねーぜ。こんな名前になったのも両親が2人とも大のゲーム好きでお互い有名なプロゲーマーだったから運命と思っただけ、何を血迷ったか苗字まで改名したらしい。正直言っただん引きだ。成人したら改名する気でない。両親は『親から頂いた名前を変えろなんて』って言っただが説得力皆無だ。俺には爺ちゃん婆ちゃんの後ろ盾があるからな。

え?なに?そんな名前まで今まで苦労しなかったかだつて?チツチツ。そりゃ凄い名前だから最初はいちやもん付けられたさ。でもすぐ仲良くなつたぜ。理由はな、ゲームさ!個人差はあれど男女問わず子供は誰だつてゲームが好きなんだよ。それぞれにハマってるゲームがある。メジャーな物からマイナーな物まで多種多様だ。俺はそのゲーム全てを網羅していたのだ。お陰でゲームを通じて仲良くなる事が出来た。これに関しては親に感謝だ。

そんな俺は現在18歳。高校3年だ。進学はしない。ゲーム制作会社への内定が既に決まってる。プロゲーマーチームからオフアームもあつたが断らせてもらった。仕事に支障をきたすと困るからな。大会なら暇な時1人で出れる。そんな子供の頃からゲームが好きな俺が今1番ハマってるゲームがこれだ。

『Minecrafter』通称マイクラ。

マイクラは様々な機種に対応しているが、俺はPC版をプレイして

いる。このゲームを一言で言うなら自由だ。何をしてもいい。Morbとの戦闘を楽しみながら鉱石採掘を目的とする洞窟探索。小麦や人参にビートルート等が取れる農業。牛や鳥に羊と言った可愛い動物を育てる畜産。そしてマイクラの醍醐味でもある建築。自分の家から有名な建物や城。或いはフィクションに出て来る巨大なモンスターを作るのもいい。ゴジラとキングギドラの建築を見た時は興奮したものだ。他にもアスレだったり、ダイヤやエンドラ討伐のRTA、データパックによる自分オリジナルの世界を作ったりも出来る。某4人組YouTubeが良くあげている動画がまさにそれだ。

色々マイクラについて説明した俺が今やってるのは最初に言った直下掘りだ。その名の通り真下の地面をひたすら掘り進める作業の事だ。いち早く鉱石が沢山存在する下層に行ける反面、マグマダイブや1.18のアップデートで出来た地下の巨大空洞による落下死の恐れがある。しかし、そのいつ死ぬか分からない所を掘り進んでいる事にドキドキし、ハラハラするのだ。持ち物はシンプル。スコップにツルハシだけだ。水入りバケツがあれば少なくとも落下死は防げる。が、駄目！それではつまらない。危機感が減れば面白く無くなる。

「いざ尋常に……Let's！直下掘り！」

そう言つて俺は直下掘りを開始した。鉄のスコップで土や砂利を掘り進め、石にぶつかればダイヤのツルハシで一気に降る。途中洞窟を発見する。が、これを無視。目指すはダイヤ鉱石のみ。そんな時、すぐ隣にマグマ溜まりを発見。2マス先だった。

「あつぶねー！後ちよつとでマグマダイブだったわ。やっぱりこのドキドキ感がだまらねえ！直下掘り最高！」

掘り進め、やがて高さを示す座標がマイナスに突入する（マイクラの高さ座標は最高で319、最低マイナス64）。その時だった。石だらけだった筈の視界が突然開けた。そこに広がっているのはもう一つの世界。硬く黒いのが特徴な深層岩が広がる巨大地下空洞。当然、視界が開けたと言う事は足場だった場所にブロックが無くなり、地面に落下している状況。それでもそこから見える景色はそれは見事なものだった。何より地下空洞の先に見える真っ赤な夕日。これ



が初見ならこれから死のうともこの景色を見ただけで満足と思えるのだろう。そう！初見ならばだ！俺は既に、いや、なんどもこの景色を見ている。俺はノートパソコンを乱暴に閉じ、ベットにダイブして一言。

「直下掘りなんて2度とやるか!!!」

マイクラへの怒りを叫び、そのまま明日の学校に備えて寝た。

翌朝は快適に目覚める事が出来た。昨日ゲームを早々に切り上げて寝たからだろう。

「あ、パソコンシャットダウンするの忘れた」

自動シャットダウンは設定しているが一応確認しようと思い起きる。そして目をパチクリさせた。

「……………どこだ？」

自分が住んでいたのはマンション。当然木造では無い。だと言うのに木で作られた部屋に自分はあるのだ。しかも改めてみるとベットがボロボロなのだ。毛布も薄いのが一枚。

「……………夢……………じゃ無いよな」

夢にしてはリアル過ぎる。よく分からないが兎に角ここを出る事にした。こういう時は動かない方が良いのかも知れないが行動せずにはいられなかったのだ。引押式の扉を押し、外に出た。すると見た事もない世界が広がっていた。そして何より目についたのが巨大な壁。1 km程離れた場所に広がる巨大な壁。この瞬間いやな予感があった。

「え、もしかして…………」

最近流行りの異世界転生。主人公が死んだ後に神様によって、或いは何かしらに連れ去られる事で起こる奇跡。可愛いヒロイン達と繰り広げる笑って泣ける異世界。しかし、そんな笑って泣ける世界じゃない異世界だってある。例えば人が簡単に死に、笑って過ごすなんて甘い世界ではないとか。

「進撃の世界に転生したか？」

俺は少し前に完結した人類と巨人が戦う漫画名を口にした。



## 世界の名前

「あーした天気になーれ！あはは！天気だ！やったぞー！明日は天気だ！何してあそぼーかなー！あはははははは！」

——開始早々ぶっ壊れた姿を見せてしまい、すいませんでした。でも考えて下さいよ。自分がいる世界が何処なのか。進撃ですよ、巨人ですよ。あれと戦わなきゃ行けないですよ。いや、別に戦うのが怖くないんですよ。……いや、少しは怖いけど一番は違うんですよ。キモいんですよ。あれ、あのビジュアルがキモいんですよ。ファンタジーとかに出てくる悪魔とかミノタウロスとかいるじゃないですか。ああいう感じじゃなくてリアルなビジュアルなだけに余計にキモいんだよ！あ、すいません。『だよ！』なんて乱暴な言葉遣いしちゃって——

「にしてもなんでだよ。なんで目エ覚ましたらこんな所にいるんだよ。なんで俺なんだよ。とりあえずこういう時は現在地を確認してと………あれ？これ不味い？」

自分がいる場所を風景を見渡しながら確認する。まず簡単に分かるのは、今自分は壁の外にいますと言う事だ。どの壁かは分からないが、壁の外にいる。進撃の世界で。もしこの壁が1番外の壁『聖母の壁』だとしたら……

そう考えた好霧終は走り出した。壁に向かって、全速力で。

「助けてくれええ！巨人に食われたなんて死にたくない！どうせ死ぬなら愛染様やディオみたいなザ・ラスボスの悪のカリスマに殺されてええええええ！」ダダダダダダ

走る、走る、ひたすら走る。一時の安定壁の中の地を求めて。こんな所には危ない。キモい奴にやられるなんてまっぴらごめんだ。それなのに、自分はどこまで行ってもゲーム脳両頬なのだ、人のことを言えないと再認識する。何故なら今自分は、

「これ疲れるうー！」ダツダツダ

ダツシユジャンプをしているのだ。自分でしてつくづく馬鹿

だなど思う。ジャンプしながら走って速くなる訳がない。そんなのはマイクラ等のゲームだけだ。でも何故だろう。普通に走るより速く感じる。多分、恐らく、大体、きつと、ただの勘違いなのだろうが、それでもその勘違いにでも縋りたかったのだ。速く走ってると思ひ込みたかったから。

そして走り続けると何故か疲れるのでは無く、お腹が空いてきた。何かがおかしい。自分の体に異変が起こっている。そんな事は分かっていたが今は安住の地を求め走る。

とうとう壁まで辿り着いた。すると壁の入り口を沢山の人が出入りしている。

「あれ？出入りしてる？あの世界って壁を出入り出来たっけ？どうだったっけ？」

記憶があやふやだけど壁を一般人らしき人が出入りするのは異常な状況だと思う。だって巨人がいるんだぞ。そう思った俺は自分を過ぎ去るモブ1に話しかける。

「あの、」

「ん？なんだい青年」

「あの…大丈夫なんですか？」

「大丈夫って？」

「だから、巨人とかに襲われたら危ないんじゃないかな」

「巨人？そんなのがいるのかい？気をつけておくよ。ご忠告どうも」

あれ？なんか反応がおかしい。あの世界で巨人の事を知らないなんておかしい筈。巨人を実際に見た事ない『死にたがり野郎』だって知っていた。恐らく絵本やなんやらで存在はどの家庭でも伝えられる筈。

「知らないんですか？巨人ですよ。人を食べちゃう化け物。小さい奴もいるけどデカければ10m以上の化け物」

「……………ふ、あははははは！」

「え？どうしたんですか?！」

「そんな化け物いる訳無いでしょ。もしかしてなんかの英雄譚とか

？そんな話聞いた事も無いけど。凄い心配そうに見てくるから冗談だつて分からなかったよ。冗談も程々にね」

そう言つてモブ1は立ち去つていく。その後ろ姿を見てある疑問が俺の脳裏に過つた。

「もしかして進撃の世界じゃない？」

もしそうだとしたら大変喜ばしい。戦うにしてもキモい相手はやだ。

自分を通り過ぎる業者Aを呼び止めた。強面で屈強なジジイだ。

「すみません！」

「んあ?!なんだ?こっちは忙しいんだ」

「あ、すみませんでした」

「…んだよ。そんな申し訳なさそうな顔すんじゃないやねえ。しょうがねえな。聞いてやる。ただし手短にな」

強い口調だったが性格は優しいみたいだ。とりあえず沢山聞く気はない。最低限の情報を。

「では、まずこの街の名前を知りたいのと、そしてここはどんな街か。どんな人達が住んでいるのかですね」

「なんだ坊主なんも知らねえんだな。そんなんで良くここまで来たな」

「すみません」

「まずここは街ではなく、都市だ。迷宮都市オラリオ。そしてここは世界で唯一ダンジョンが存在するのが特徴だな。お陰で常に商売繁盛。色んな人が住んでるがダンジョンで生計を立てる冒険者が多いな」

「ちよつと待つて下さい。一旦情報を整理させて下さい」

俺はジジイを制止する。色々と予想外の情報に困惑しているのだ。とりあえず情報を整理しよう。分かった事は、この世界は進撃とは別の世界だという事だ。これはとても喜ばしい事だ。お陰であのキモいのは会わなくて済む。そして気になったのは『オラリオ』という都市名。そしてダンジョンが存在する事、ダンジョンで生計を立てる冒険者。なんか聞いた事がある。喉の所まで来ている。

「ええっと、冒険者つてのはなんですか？」

「それも知らねーのか坊主。冒険者は神様の眷属になって力を授かった者の奴の事だ。ファミリアって言う組織に属してるぜ。特に人気なのはロキファミリアだな。強さもフレイヤファミリアと双璧って言われてつと、もう時間も限界だ。ここら辺でな坊主。頑張れよ」

「あ、ありがとうございますー！」

俺はジジイ改め、じーさんに礼を言う。じーさんのお陰でこの世界が分かった。この世界は『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』、通称ダンまち。ダンジョンというモンスターが出て来る世界。主人公が白髪で、成長チート系だというのは知ってる。見なかったけど。なんか美少女に助けてもらってその子に憧れてんだっけ。普通立ち位置逆だろとツッコんだのは覚えている。

兎も角、ダンジョンという響きがいい。マイクラの洞窟を彷彿とさせる。

俺なんで気付かなかったんだろう。こんなに分かりやすいのに。マイクラの空腹ゲージやホットバーに酷似した情報が常に俺の視界の右下に表示されてる事を。

「…なんだこれ？………まさか」

異世界。という事は殆どの可能性である転生者への特典。俺は頭で思い描く。『インベントリを開く』イメージを。すると現れた。空  
白なインベントリが。これで確信した。自分が転生して際に手にし  
た能力は自分の大好きなゲーム。『マイクラ』なのだ。

## ルールの違い

「今後どーすっかな」

俺は頭の後ろで手を組みながらを呟く。現在今はこのまま手ぶらでオラリオに入っても大して出来る事も事も無いと思いい、一度状況を落ち着いて整理するのと、良く確認もせずに家を飛び出したから何か使えそうな物がないか調べる為に家に帰る最中だ。手ぶらに無一文で門を叩いてもファミリアに入れてくれるなんて保証は無いからな。

「たっつでえまー殺風景なマイハウスよ」

玄関を勢いよく開ける。誰もいるはずが無いので当然シーンと静まり返る。そんな事を無視して自分の家を改めて見渡した。殺風景で何も無い家。ワンルームでキッチンが無い、風呂が無い、花も無い。レンジ、冷蔵庫、食器棚、何もかもが無い。あるのは洗面台とベツト、それと四方30cm弱の箱ぐらいだ。これで一体どうやって過ごすんだと言いたい。

「寂しい家だな、ホント。もし俺を呼んだのが神様なんだとしたらもう少しリッチな家にしてほしかったな。あ！そうしたらオラリオ行かねーか。こりやいけね」

冗談を口にして頭をポンツと自らの頭を叩く。この何もない家も全てはさっさとこの家を捨ててオラリオに行行って事なのだろう。だがそんな何もない部屋で違和感を覚えた。重要な物がありそうだと。

「ん？今なんか大事な物を見落としてる様な……………箱？……………」

チエスト…チエスト?!チエストオオオ!!?」

俺は走り出した。その小さな空間に無限の可能性を持つ宝島『ワンピース』を目指して。マイクラをやってる人ならこの気持ちを分かってくれらるだろう。チエストがどれだけ偉大であるか。何もない状況からチエスト一つでその後の進行速度は大きく変わる。防具や装備、ダイヤモンドや黒曜石の鉱石。そしてなによりエンチャント本。チエストはそんな魅惑の存在なのだ。俺はまず片方のチエストに手を掛ける。



「さくで、チェストちゃくくん。僕ちにダイヤ装備や修繕本を素直に渡しましょーね！」

ギユウオ

チェストは開けた際の独特の効果音を奏でながら開かれる。

「おお?!」

未知の感覚に思わず声が漏れる。感動だ。さつき開いた時は手持ちのインベントリがカラだったから何も無かった。しかし今は違う、中身があるのだ。実体が見える訳じゃない。それもその筈、あんな小さな箱に大量の物を内包するなんて所業が出来るとは思えない。ならばどうするか? 答えは一つ、このチェストはアイテムをデータ化したのだ。システム的には銀行と似た様な物だろう。実際にある物をチェスト(銀行)に預けてデータ化(数値化)し、必要な時に取り出す。違うのはチェストは内包されたデータを通帳に数値化するので無く、情報として頭に流れ込むのだ。チェストを開いた瞬間、その内包されたデータが頭に流れ込んで来たのだ。どういう原理は検討も付かないが、この時俺は、改めて自分は異世界に来たのだと再認識した。

しかし、その感動も一瞬で失せた。チェストの中身があまりにも残念だったからだ。その内容とは木装備一式と革のチェストプレートである。どんな物か想像は付くと思うが簡単に説明しよう。異世界のモンスターに簡単に壊れる胸当てと木刀で戦えと言われているのだ。「しよぼ過ぎて草も生えねーよ。荒野だよ、砂漠だよ。なんやこのクソゴミチェスト。最低でも鉄装備くらいは入ってるやボケ」

ギユポン

チェストを乱暴に閉めて悪態つく。必要最低限しか入ってないチェストを目の当たりにし、次なるチェストを開く気が失せてくる。どうせこのチェストも碌な物入ってないだろうと。しかし、その思考も直ぐに吹き飛んだ。

「たく、俺の感動返せってんだよ……うっ☒」

突然原因不明の頭がぐるぐる回る感覚と強烈な吐き気に襲われ、俺はトイレに駆け込み込み、込み上げてくる物を全て吐き出した。

「オボロロロロ」

2. 3度胃の中の物を吐き出し、幾分楽になったとはいえ気持ち悪さは取れない。

「一体なんで……？状態異常？」

状態異常を知らせる信号が脳裏に走る。調べると『酔い』と出た。つまり酔っているのだ。

「成る程、急激に情報を取り込んだからそれに酔ったのか。VR酔いみたい……ッ！オロロロ。はあ、はあ。一体いつまで続くんだよ……はあ、最悪」

5分だった。この後俺は5分間トイレに籠り、吐き続けたのだった。

5分間を終え、えらくげっそりした俺はベットに寄りかかる。

「ああー、散々な目にあつたわ。きつと今後もずつつて訳じゃ無いだろうが慣れるまでは大変だぞ。……待てよ？たった6つ（剣、ツルハシ、斧、スコップ、クワ、チェストプレート）であんな酔うなら全部埋まったチェスト開けたら……ゾワッ」

チェストだと27、ラージチェスト54スタック収納出来る。そんな事、想像するだけでも胃液が逆流する感覚に襲われる。だが使いたく無いと思ってもいつかは使わなければいけない日が来る。その為に序盤のうちの目標を1つ制定した。『酔いを克服する』

「ふうー。てか、この世界どうやったらドロップするんだ？」

ここはダンまちの世界。例えマイクラの能力を持っていてもダンまちの世界なのだ。法則が違うは違う筈。例えばマイクラでは一部のブロックを除いて殆どのブロックは空中で固定出来る。例えばなんの支えもない土が空中で固定される。だが、そんな事現実では不可能なのは考えなくても分かる。ならドロップの仕組みは？斧で木を切ったとして、果たしてそれはそのままドロップしてくれるのだろうか？箱を斧で壊して同じ形のままドロップするか？そもそもその話、素

手で木を切ったり土を掘るなんてまともに出来るとは思えない。そう考えるとこの5つにすっかりとした意味がある様に思えてきた。

「もしかしてマイクラと違って全ての物がそれに対応する装備でしかドロップ出来ない？木なら斧でしか、土はスコップでしか掘れないとか」

試しに床の木を素手で叩き始める。だが、いくら叩こうとドロップする気配は無い。それどころか、より強く叩けば手が痛くなるだけ。なら今度は斧を持って床に叩きつける。すると木に亀裂が入り、みるみると広がっていく。

「え、やばい。ドロップするとは思えないんだけど。粉々になる未来しか見えないんだけど」

亀裂が広がるに比例して不安が大きくなる。そしてとうとう終わりの時が来た。

ポコ

「えええ、マジでドロップするやん」

床の一部が立方体にくり抜かれ、足元に先程壊した木が手の平サイズで地面スレスレの位置で上下にふわふわと浮いている。

「やっぱりゲームとは多少なりとも違いはあるもんだな」

木材を拾おうと近づく。するとアイテムに触れるより手前で姿を消した。すると先程まで目の前にあった木材が、ホットバーの1番左に表示されていた。ホットバーにある物はインベントリを開かずとも持とうとする意思を示せば手に持つ事が出来る。

「ここはゲームと一緒に言うか重っ?!かなり重いぞ!」

30cmちよいの立方体の木材。後々考えてみればそりや重いだろう。

木材を手を持つのを手に持つ事をやめて一息付く。そして『よし、やるぞ!』と声を出して自分を鼓舞する。ここまで分かればやる事は1つ。間違い探した。全部は無理だが、最低限の知識は欲しい。一体どこまでマイクラと同じで、どこが違うのかを。

「調べられるって言ったらくんくらいかな」

日が暮れるまで色々と検証した。

1、ドロップした物が地面に浮いている段階では全て手の平サイズと化す。

2、土系はスコップでのみドロップする。

3、空中のブロックは自由落下する。ただし、僅かにでも地面に触れる、又は間接的に触れていれば自由落下する事は無い。

4、草や花は素手のみドロップする事が出来る。

5、花が咲いている土をスコップで掘った場合、苗の状態でもドロップする。

6、木を斧で切ると、切った部分の原木のみドロップし、上部はそのままの状態でも倒れ、切り株が残る。

7、倒木した木の幹を斧で切ると原木がドロップする。

8、切り株を斧で切ると原木ドロップする。

9、倒木した木の葉を素手で千切ると低確率で苗木とリンゴを落とす。

10、倒木する前の木の葉をちぎっても何もドロップしない。

11、木の枝を斧、又は素手で折ると棒をドロップする。

12、苗木はただ地面に置く事は出来ず、土を掘った穴の先が地面だった場合にのみ、その穴に植える事が出来る。ただし育つまでの時間は不明。

13、松明は壊さなくても手に取るだけでいい。

14 リンゴは美味しい。

ざっとマイクラと違うのはこんな感じだ。他はマイクラと同じ。原木から4つの木材がクラフト出来る事。4つの木材でクラフトテーブルの製作が可能な事。石剣や石の斧もクラフトテーブルを使い、数秒で作れる事。そして何より、

「最大のチートはこれだよな」

ベットのリスポーン地点の設定。例え死んだとしてもベットにリスポーン地点を設定さえしてれば生き返れる。試しにリスポーンを設定した後、近くの渓谷で飛び降りた。結果、戻って来る事は出来た。

「もし死んでたらどうなってたかね。でもこれはギャンブルする意味はあったな。どうせ冒険者やるんだ。死を恐れて挑戦出来ずに雑魚でいるならそれはもう死んだも同然！例えVR（現実）でもやるからには目指すはトップ！それがゲーマーだ！」

因みに設定する前に試しに飛び降りては無い。だからもしリスポーン地点を、壊されて死ぬとどうなるかは分からないのだ。他にもルールの違いは出て来るかも知れない。その時はその都度情報をアップデートすればいいだけだ。

「ああ！明日からオラリオで冒険者生活スタートだ！オラスツゲーワクワクすつぞ！冒険王に！なるってばよ！」

「でも、ルールが違うという事は新アイテムもあるって事。これはどう使おうかな」

## Oh My God

翌日、眩しい朝日に照らされ、好霧終は気持ちいい朝を迎えられた。冒険者ノートの1枚目としては最高のスタートを切った。手早く支度を済ますと、我が家に別れを告げ、家を飛び出してオラリオへ駆けた。

そしてオラリオに辿り着くや否や、キョロキョロと何かを探し始める。

「あつた」

簡単に見つけられたそれは階段である。俺はオラリオを囲う壁の上部へと続く階段を探していたのだ。渦巻き上に続く階段を駆け登る。階段を登りきり、オラリオ全体を見渡した。

「うわあ、やっぱり大きい所だな。ここから俺の最強伝説が始まるんだな。……さて、それじゃこれからお世話になる場所に挨拶しておきますか」

中央にあるデカイ塔に体を正対させ、息を大きく吸ってお腹を中心に体を縮こまる。まるで大技を撃つ前の溜めみたいに。

「オラリオ——！」

縮こまりながら都市の名前を言ったかと思うと、縮こまらせた体を大の字に解放した。

「キタア——！！」

大の字のポーズを取ってオラリオ中に叫ぶその姿は、どっかの学園の全員と友達になる男を彷彿とさせる。これがやりたいがためにこの壁に登ったのだ。

ただ、勢いでやったはいいものの、既に街に人が歩いてる時間。当然人の目に止まり、街中の人から奇妙な視線を向けられる。

なんだあいつ？

ほっとけほっとけ。オラリオに夢見てたどっかの田舎もんだろ

ねえママァ、あの人何してんの？

見ちゃ駄目よ

壁の上にもでその声は届かない。だが、聞こえなくても察しはつ

く。

「何言つてつか聞こえねーけど、どうせ馬鹿だと思ってるんだろうな。ま、今はそれでいいさ。いずれテツペン取る男の姿、忘れたら損だぜ。聞こえてねーだらうけど」

独り言を残してその場を去る。

「ささてきてさーて、冒険者になるにはまず神の眷属に入れてもらうんだよな……………どうやって?」

いきなり危機に陥った。あのじーさんは言っていた。『神様の眷属になって力を授けてもらった者を冒険者という』と。だが彼は肝心な事を私に教えませんでした。神への会い方です。

「どうやって神に会うんだよ。教会か?」

とりあえず教会を探しながらすれ違う人に片っ端に聞き込みを始める。

「すみません、神様ですか?」

「いいえ」

……………

「すみません神様ですか?」

「なわけないだろ」

……………

「神様ですか?」

「そう見えるかい? 嬉しいねえ」

……………

「ねえねえ、ボクって神様?」

「ばあぶー」

……………

「やばい、どいつもこいつも普通の人間だよ。神様どこいるんだよ。最後のに至っては完全に赤ん坊に聞いてたよ。バカなの? 俺バカなの? てか本当に神様いるのかよ。教会らしきものはあつたけどもう誰も居ねーよ。ボロボロだもん。廃墟だよ」

1時間は道行く人に聞いて回ってるが、誰一人として神はいなかった。一応教会は見つかった。だが、ボロボロでまともに神様がいたら

は思えない。そもそも本当に神は存在しないと疑問さえ持ち始める。神様が普通に街を歩いてるなんておかしいと。つまり騙されたのだと。あのクソジジイめ。

「はあ、やってらんね。次で最後にするか……おっと、そのナイスダンディなおっちゃん。おっちゃんって神様？」

「なんだ？神様探してんのか？」

「……あなたが！oh my god。オオ、神よ。どうか神なんていないと思った愚かな私めをお許しください。あわよくば力をお与え下さい」

「いや、神じゃねーよ俺は」

「チツ。違いのかよ！紛らわしいんだよ！じゃ神はどこいんだよ！」

「急ならキレるなって兄ちゃん。神様探してるって事は冒険者なりたいのか？」

「あ？そうだけど」

「ならギルド行つて紹介してもらいな。生憎俺は冒険者じゃないからそこら辺に疎くてな。ギルドなら色んな情報貰えると思うぜ」

「マジすか?!サンキューおっちゃん！いやー、おっちゃん最高。今までは神が聞いても『違う』って返されるだけでさ。途方に暮れそうになってたんだよ」

「はは、聞き方が間違ってたんだな。それじゃ、俺は先を急ぐよ。ギルドはこの道を真っ直ぐ行くと正面にあるから」

「ゴッドファーザー、貴殿の余生に幸あれ」

「余生って言う程歳取つてねーわ！じゃ、頑張れよ」

「おう！助かったぜ！今度奢らせてくれよ！俺の名前は好……いや、『ステイブ』、マインクラフター『ステイブ』だ！いづれテツペン男の名だ！忘れんじゃねーぞ」

玄亥夢好霧終、改め、ステイブはゴットファーザーに手を振ると、夢に向かって走り出した。

「ギルドかあ、色んな冒険者いるんだろうなあ。剣士、魔法使い。巨大な盾持つてる人やメイスに槍とかの武器もあるんだろうな。そつ



か、異世界なら亜人もいるかもな！エルフにドワーフに狼男に猫娘ならぬ猫女にアマゾネス、人魚に半魚人、ケンタウロスにミノタウロスにリザードマン、鬼に天狗にハーピーに龍人。パツと思いつくだけでこんなある。どうせなら色んな亜人みたいな！よーし！頑張るぞいつ！」

今後彼には様々な試練が待ち構えているだろう。だが持ち前の明るい性格と、鍛え抜かれたゲーム脳で乗り切って欲しいものだ。

「ステイプか。その名前、覚えておくとするか」

## 田舎もん

「おおー……ここがギルドか！」

現在俺はギルドに来ていた。ゴッドファーマー（仮）の助言を信じて彼から教わった道を走った。走って10分後、ようやくギルドに辿り着いた。異世界だから文字が違うなんて事は大いにあり得る。看板の文字が読めずに目の前にあるギルドに気付けないなんて不安が過ぎつつだが、……ここがギルドだという事はすぐに分かった。何故なら一般人では不必要な防具や武器を身につけている人達が入り出しているからだ。

（冒険者がすげえ出入りしてる。確かにここならファミアについて教えてもらえそうだな。マイクラで出来なかった装備を腰に携える事も出来たし一目で冒険者を目指してるって分かるだろう。サンキューゴッドファーマー）

ステイブは腰に携えてる4つの装備を撫でた。

因みにここに来るまでの道中でリンゴを食べ尽くしてしまった。空腹ゲージは満タンになったとはいえ、これで無一文で食料も無い状況。早くファミアを見つけなければいけない状況になったという訳だ。

いざギルドに入ってみるとロビーには沢山の冒険者らしき人の姿があった。彼等はステイブを一目見ると、彼から目が離せなかった。それはまるで、田舎出身の友達が都会に来ると言うから迎えに行つてやると、田舎者だと思われなくなかったのか、見当違いも甚だしい星型サングラスに、狼の毛皮で作ったマフラーに、クリスマス風の装飾を身につけたトレンチコートを着ていたのを目撃したかの様な引いた目だった。

「なんだあアイツ？」

「ほっとけよ。ありゃ単なる馬鹿だ」

しかし、そんな目にステイブは気付いていない。彼等には目も暮れず、自分の進む道を堂々と歩く。

「すいませーん、冒険者になりたいんですけど」

「はい、…冒険者にですか?」

「そうです。冒険者になるにはファミリアに入団しなきゃ行けないって聞いたんですけどどうすればいいか分からなくて」

声をかけると受付嬢が対応してくれた。この時、冷静に会話してる様に周りからは見えるが、この時実はステイブ……興奮していた。

(やべえ、マジか。実物だよこんな早く?)

何故なら受付嬢の種族がエルフだったからだ。夢見ていた亞人に早速出会えた奇跡に興奮を覚えた。しかし、それを決して表立って表す事ほしくない。それをすれば気持ち悪がられるからだ。それがヲタクが社会に溶け込む術である。例えば、好きな事を目にしても顔に出さないで心の中だけで盛り上がる。頭は冷静<sup>クール</sup>、心は熱<sup>ホット</sup>くだ。

しかし受付嬢は彼の格好を見て爆笑するところを、得意の営業スマイルで耐えていた。何故なら、ステイブの見た目があまりにもおかしいからだ。左腰に帯剣しているのは分かる。しかし、何故同じく左腰にツルハシ、右腰には斧とスコップを携えているのだろうか。

受付嬢であるエイナは自分がまだファミリア未所属の人がギルドを訪ねて来た際、その人物が何系のファミリアに入りたいかをよく当てていた。しかし、今回は彼が何系のファミリアを希望しているか見当違いも付かなかった。

(剣って事は素直に探索系でいいの?でもツルハシがあるって事は鉱石を集める為。なら制作系になる。でもスコップは?スコップでやると言ったら土を掘る事だけど2つとは関係ない。土を掘る……整地?整地が必要なのは建物を建てる時とかだけど建築系でいいの?いや、もしかしたら自分で目立つ格好をする事によって注目を得て宣伝している商業目的?もう何がなんだか分からないわ!他にも斧持ってるし、なんなのよこの人!)

今まで見た事ないヘンテコな格好で現れたステイブに内心苛ついていた。

「え、えつとー、希望のファミリアはございますか？」

「マジか☒エイナさんが希望ファミリアを予想する事が出来なかっただ☒」

「今までその観察眼で数多の冒険者の希望ファミリアを当てて来た彼女が!?」

「アヤツ、何者じゃでござるドンか☒」

(そうよー訪ねて来た人の見た目や顔つき、その他諸々で判断して何系のファミリアを希望してるか当てる。そしてそれを見た冒険者達が私を褒め称えるのが何よりの楽しみなの！それをおこの男があ) 彼女の内心はもはやマグマが噴火しかけていた。

「何系とかあるんですか？出来ればダンジョンに挑みたいんですけど」

「そうですね、それなら探索系ですね。基本的ダンジョンに潜り、モンスターの核である魔石を売る事で生計を建てています」

「あ、それです。それで結構です」

(結局シンプルな探索系かよ！紛らわしい格好してんじやないわよ)

心の中で毒づくエイナ。そこには容姿端麗で賢くて優しい『理想の彼女ランキング』で毎月トップ争いをしている彼女の姿は無かった。

「探索系ファミリアでしたらロキファミリアやフレイヤファミリアがございますね。ただ、強いファミリアという事はそれだけ入団が難しくなりますね。フレイヤファミリアは主神であるフレイヤ様が気に入った者しか入団させない方針ですし、ロキファミリアも入団テストが、難関でしてね。丁度今日の午後からです…」

「ならロキファミリアでいいや。あんがとなエルフの受付嬢さん」

エイナが丁寧に説明しているにも関わらず、ロキファミリアの入団テストが午後からあると聞いた瞬間、彼女の説明も切り上げてギルドを飛び出した。

「あーちよつとー」

彼女はステイブを呼び止めようとするが彼は彼女の声が聞こえなかったのか、はたまた無視したのか振り返らずに走り去って行っ

た。

「なんだったのよ、一体」

これが後にオラリオを震撼させたステイブとの出会いだった。

「俺は何故飯も無いのに走るなんて馬鹿な真似をしたんだよ。お陰で空腹ゲージが減り始めたじゃねーか」

## ロキファミアリア会議

ロキファミアリアの拠点、『黄昏の館』。そしてここはロキファミアリア団長、フィン・ディムナの一室である。その一室にベートとアイズを除いた団長のフィンをはじめとする幹部5名《フィン、リヴェリア、ガレス、ティオナ、ティオネ》、そしてラウルとアナキティが集まっていた。全員が集まった事をフィンが確認すると同時に今回の用件をみんなに話し始める。

「全員揃ったね。今日君達を呼んだのは他でも無い、午後から実施される入団試験の試験官をしてもらいたいんだ。今回の入団希望者は100人を超えていてね。希望者が増えると言う事はそれだけ人気がって事なんだけどとても僕1人じゃ捌ききれない。そこで、試験会場を分けて各試験会場の試験官を君達に頼みたいんだ」

「フィン、試験官するのは良いけど具体的には何をすればいいの?」  
ティオナが『はいはい』と元気良く手を上げて質問する。

「そこまで大した事じゃ無いよ。10m四方の部屋に1人ずつ受験者送るから実力を見極めて欲しい。相手の持ち味を引き出すよう努力してくれ。間違っても相手が手の内を出し切る前に試験を終わらさないでくれよ。でも、だからって何も反撃しないのは無し。防御テクニックも知りたいからある程度は許可する。でも相手のレベルを考えての反撃でね。つい忘れて相手を大怪我させる事だけは厳禁。相手が反応出来ない速さでの攻撃もNGで。」

他は何もしなくていいよ。入室までの案内から退室後まで、事前に案内役に立候補してくれた子達がしてくれるから」

「それくらい私だって分かってるよ!他には?何かある?」  
(大丈夫かなあ……)

お気楽に言うティオナだが本当に力加減だったりこれから伝える決まりを忘れないか不安が増していく。そんな中、彼女の姉であるティオネがフィンに質問する。

「団長、アイズとベートはどうしたんですか?」

彼女は幹部でありながらこの場にはいない2人について不思議がる。

彼女達2人がこの場にいないくて、ラウルとアキナテイの2人がここに  
いると言う事は、本来アイズ達2人がここに居るべきな筈、テイオネ  
はそう考えた。

「それについてはこれから話す君達に課す守ってもらいたい合否の  
仕方を聞いてもらえれば分かると思う」

「仕方？普通に君合格、君不合格じゃダメなの？」

「微妙なラインで合否どうするか迷った場合が問題なんだよ。戦闘  
は学問と違って数値に現れない。基準が曖昧になるんだ。試験官は  
会場毎にバラバラ、つまり合否の基準もバラバラになる訳だ」

「なるほど」

身体能力と言う意味では数値で測れる事も出来る。しかし、数値は  
恩恵を貰えばやればやる程伸びる。最低限の身体能力があれば気に  
しない。

この試験で知りたいのは戦闘センスと意気込み、覚悟だ。どれだけ  
戦いで工夫する事が出来るか、どれだけ敵を傷つける覚悟があるか、  
生き残る為に敵に非情になる覚悟があるか、それが知りたいのだ。

「だから今回はその基準を付けようと思う。それは、必ず受験者の  
攻撃を受けて倒れてくれ」

「え？」

「攻撃をわざと受けるの？」

試験は基本、試験官は模擬刀だが受験者は持参した武器を使用す  
る。つまり、刃がついていて斬りつけられれば傷を負うのだ。勿論そ  
んな事フィンが想定してない訳が無い。

「そんなに驚かなくていいよ。攻撃を受けるって言っても受験者の  
攻撃を模擬刀で受けたけど勢いを殺せなかった風を装ってくれて  
事」

「なんだあ。てつきり斬られてって言われてるのかと思った」

「そんな訳無いよ。僕がそんな事させる様に見えるかい？」

「もしそうなら私がウイン・フィンブルヴェトルを貴様にぶち込む  
所だった」

「本当にごめんってリヴェリア」

「冗談だ」

リヴェリアの分かりにくい冗談に一同が苦笑いする。

「まあ、さつき言ったのはセンスが乏しいと判断した者への救済処置だ。倒れた所で追撃して来たら合格。無ければ不合格にしてくれて構わない。その場合は『参った』って言って適当に褒めて、後は事前に立候補してくれた案内役の子に任せて良い」

「じゃもし襲いかかって来たら」

「合格。追撃を躲して返り討ちにしてくれ。受験者が負ける、それが合格の合図と案内役の子に伝えてある。センスが乏しく、今は実力も無いけれど、その覚悟が有れば大成する可能性を秘めている。この神から恩恵を貰える世の中ではね」

倒れてる敵を見て余裕を感じたなら、それは2流3流の証拠だ。1流は違う。止めを刺しに行く。この時点ではまだ勝利では無い、所詮優先に過ぎない。優勢と勝利は似て非なるもの。ハッキリ言えば優勢にまだ意味はない。勝利して初めて意味が生じるのだ。数少ない隙、絶好のチャンス物を物に出来ない者に勝機は無い。ただでさえセンスも実力も無いのだ。ならば勝利を得る為、生き残る為に死に物狂いになれ。それも出来ない者にロキファミリアに入る資格は無い。

「ならセンスがありながら倒れている私達を追撃して来なければどうする？」

リヴェリアが問う。さつきとは逆、センスはあっても覚悟が足りない者はどうするか？

「それは合格で構わない。覚悟は入団させてから覚えさせれば良い。センスはそれ程重要なスキルだ」

「分かった」

「ああそうだ。気付いてない人には手を抜いてる事も教えて上げてほしい。それを聞いた彼等の反応を各自ロキに報告してくれ。最終的には2次試験の面接で決めるから」

「ええ〜？」

「面倒くさいのお」

「文句を言うな2人とも。ロキファミリアの今後に関わる重大な事



だぞ」

文句を垂れるティオナとガレスをリヴェリアが注意する。少し大袈裟かも知れないが言ってる事は正しい。

フィンが見たい反応とはつまり、今まで手のひらの上で踊らされていた事実には、彼等はどう言う反応するか。自信喪失しやる気を失うのか、それとも悔しがり闘志を燃やすのか、それが見たいからだ。もし前者なら、例え能力は人並み以上でも心が弱い。大成する確率は低いだろう。逆に後者なら大成する可能性を存分に秘めていると言える。

もしその報告をせず、覚悟しか無く、打たれ弱い者を入れるのは、頭数を増やせば良いと考えると同義。それはロキフア<sup>最高位</sup>派<sup>閥</sup>アミリアがする事では無い。一応前者も1次試験は合格扱いだから2次試験に進めるが、何かロキの心に驚掴みする物が無い限り、不合格となるだろう。

「後の事は案内役の子が、受験者の試験会場への案内から退室後の合否で違う案内まで全てやってくれる」

フィンは試験官の仕事を説明した上で先程質問したアイズ達の事を逆にティオネに尋ねる。

「ティオネ、これが試験官の役割だ。あの2人に出来ると思うか？僕は出来ないと思うからここに呼ばなかったが」

「……確かに」

ティオネが口にし、他の者は頷く。彼女達にこんな事出来る訳が無い。アイズの場合、やられる際に下手な演技をして水を差すか、力加減を間違えて受験者を怪我させてしまいうだろう。ベートは論外だ。だからそんな彼等の代わりに2人が召集されたのだ。

時刻は1時を過ぎ、試験官達は各々の持ち場へ移動していた。

「さあ今回は何人入団するっすかね」

「何人の前に入団者がいるかどうかでしょ」

「3回連続入団者ゼロじゃからな」

「私つまんなくい」

「つまんないって問題じゃ無いでしょ。まあ気持ちは分かるけど」

「仲間が欲しいからって甘い採点はダメだぞ」

「分かっておるわ」

「それじゃ次期団長、一言頼むわ」

「分かったつす。それじゃ、試験官頑張るつすよー！」

「「「「「……なんかしまらない（わ）（わい）（ねく）（わね）（な）」

「酷いっす」

自室からロキファミアリアの門を叩く入団希望者を眺め下ろすフィ  
ン。

「そろそろ誰か来て欲しいんだけどな。……………☒……………凄いい子が  
いるんだね。面白そうだから僕が見ようかな」

そう言っつて見つけたのは剣、斧、ツルハシ、スコップ、そしてクワ  
を身につけた青年の姿だった。

「クワ身につけてれば畑も耕せるつて思われるかな」

## 筋肉モリモリマツチヨマンの変態

「テメエ！ナメたこと抜かしてんじゃねーぞ！」

ステイブは屈強な漢に胸ぐらを掴まれ、今にも殴られそうになっていた。こうなった経緯は少し前に遡る。

月に1度開催されるロキファミリア入団試験当日。我こそはロキファミリアに入団してみせると、様々な人種の男女が黄昏の館に足を踏み入れる。その数、3桁は下らない。その誰もが最強の一派の仲間入りをすべく集った者達。中には元いたファミリアを辞めてまで試験を受けに来ている者までいる。彼等の気合いは充分と言えるだろう。

しかし、彼等とは打って変わって体調が優れなそうにお腹をさすっている人物が1人。何を隠そう、ステイブである。その表情はともやる気があるとは思えない。

（あー、食いもん欲しいーよお。ゲージ満タンにしてーよお）」

ステイブが言ってるゲージとは『空腹ゲージ』の事。その名の通り、どれだけお腹が減っているかを表している。最大10の0.5ずつ変動する20段階仕様。ゲージが3以下になると走る事が出来なくなる制限を食らう。ただでさえ圧倒的経験不足の戦闘試験（あると予想）で自ら枷を嵌める事になってしまう。現在のゲージは8。行動制限まで後5の余裕があり大丈夫に思われるがとんでもない。空腹ゲージは一度減り始めれば時間の問題だ。みるみると減り続け、気付いた時には制限を食らっている。

「オラリオに来る前に牛とか豚とかなんでも良いから仕留めて焼いておけば良かったなあ」

そんな事言っても今更遅い。過ぎてしまった事の後悔を溢しながら背中に背負っているクワを引き抜き、手に持ち眺める。

「せめて種と骨粉さえあればこれでパン作れたのに」

「おい」

クワを見下ろしていると地面に影が写る。それと同時に頭の上から野太い声が聞こえた。顔を上げると自分の一回りも二回りも大きい肉体を持つ漢が目の前に立っていた。

「デツカ」

思わず声に出る。自分が小さい訳じゃ無い。身長に触れてこなかったが180あるんだ。この漢が大き過ぎるんだ。それもただ大きいだけじゃ無い。筋肉モリモリマッチョマンの変態だ。ムキンクスかよ。

「おい、聞いてんのか？おい！耳クソでも詰まってるのか!!」

「ああ、大丈夫です。ただあまりに大きかったんで驚いちゃって」

「あ、ああ。聞こえてんならいい」

彼の肉体に圧倒されて反応に遅れた。漢も返事が遅かった事にイラついていたが、自慢の肉体を褒められた事が嬉しかったのか、それ以上返事について追求してこなかった。漢はそんな事よりもステイブの姿に物申したい様子だ。

「なんだその格好は？」

「見て分かりませんか？冒険者ですよ。てかここに集まっている時点で冒険者以外無いでしょ」

「そんな事見れば分かる。俺が言ってるのはそのふざけた格好はなんだと言ってるんだ」

「ふざけた？」

漢にふざけた格好と言われて頭に？を浮かべる。自分の格好の何処がふざけているのだと。

「そうだ。そんなふざけた冒険者がいてたまるか。剣に斧にスコップにツルハシにクワ。そんなメチャクチャな武装があつてたまるか」

「やだなあ武装って。剣があるのにわざわざスコップとか使う訳無いじゃないですか。剣以外に使うとしたら精々斧だけです。他は戦闘で使いません」

「なら何故持ち歩いている？」

「使うからです。木を切り、地面を掘り、鉋石を掘って、畑を耕す。

その何がおかしいですか？」

「?!」

ステイブの解答に漢は目を丸くする。周りの人も同様だ。しかし、彼等の口角が次第と吊り上がり、笑い声が辺りに響く。

「ハハハハハハハハハハッ!」

「ッ!」

急な音量に咄嗟に耳を塞ぐ。

「こいつあ笑いもんだ!聞いたかみんな!こいつは鉱石を取ったり耕す為に武器以外を持ち歩いてんだってよ」

「なんか可笑しいですか?」

「ああ可笑しいね!冒険者になってやる事がモンスターを狩る為じゃなくて鉱石掘って畑だあ?あれか、まともに戦う勇氣は無いからダンジョンに入る為に冒険者になって鉱石売ったり野菜売って稼ごうって腹か?あわよくば発展アビリティでより良い物売ってお金持ちか?」

(発展アビリティってなんだ?でも商売か、余った分は売るのはナイスアイディアだよな。マイクラでもそうだったけど大きい畑作るのは面白かったけど後々気付いたもん。こんなに量絶対要らねーだろって。……何にせよ……)

「お前頭悪いな。鉱石の状態で売るなんて勿体無い事するかよ。どうせなら剣やら防具やら作って売った方がよっぽど効率的に稼げるだろ。そんな事も分かんないのか」

言われっぱなしは性に合わないの言い返す。それに勇氣無いとか言われたが、既に覚悟なら決まってる。ゲーマーは覚悟を決め決めるのだったり、判断するのは速いのだ。FPSなどをやっている一瞬の迷いが命取りだから。恋愛ゲームに鬩り付いてるマニアとは違うのだ。しかしそれが逆に相手を乗せてしまった。

「お前、武器作れんのか?!そりや大したこったな!結構いろんな事出来て。でもな、ますますお前が戦う勇氣がねえ臆病者だって分かっちゃまったぜ!」

「はあ?臆病者?」

「そうさ。臆病者さ！自分では戦えねえ。けどスゲーって言われてえ。そこで鍛冶師さ！ムカつくんだよなあ。自分で戦いもしねーのに自分の道具を使った奴が活躍すると『俺のお陰』みたいな勘違いしやがってな」

「……」

「いやいや、お前らの武器がスゲーんじゃないなくて、俺達がスゲエだけなのにな！それどころかあいつらの武器はちよつとモンスター斬ると簡単に刃こぼれるわ、欠けるわ、折れるわ、雑魚すぎww。そんな不良品渡しておきながらこつちに文句言いやがってよ。大事に扱えだの、毎日手入れしろだの、鬱陶しいんだよな！使ってやってるだけでも感謝しろっての！なあみんな！」

「……」

「まあそんな臆病者が来る所じゃねーんだよここは。適当な所のファミリアでも入団して精々命の危険が無い所で金属と睨めっこしてくれや。良けりや俺がお前の武器使ってやるよ。無料でな！あはははは！」

「……あー、ダメだ」

漢の演説に周りも釣られて盛り上がる。彼の言いたい事はつまり、『俺達あつての鍛冶師なんだからもつと俺達を敬え、媚びへつらえ』と言う事なんだろう。この言い分を聞いて黙っていたステイブが頭を掻きながら口を開く。

「聞いてるだけで虫唾が走るわ、お前らの言い分」

「あ？」

「いるんだよなあ。ただ戦えるだけで偉いって思い込んでる奴。馬鹿みてえ」

「なんだと？もういつペン言ってみやがれ！」

ステイブの胸ぐらを掴み上げる。ステイブの足が地面から離れた。それでもステイブは言うのを止めない。

「馬鹿みてえつつつてんだよ！筋肉つけすぎて脳みそまで筋肉かテメエ！鍛冶師は臆病者？使ってやるだけ感謝しろ？馬鹿じゃねーの。そんな臆病者の武器がなきゃどうせモンスターと戦う勇気も無い」

せによ！勘違いしてんじゃねーよ！可哀想だから鍛冶師はお前らみたいなクスにも恵んでやってんだよ！武器がなきゃモンスターに殺されるってな！」

「こんなガキイ……」

「テメエらの手足が鍛冶師じゃねーんだよ！テメエらが鍛冶師の傀儡人形なんだよ！」

「テメエー！ナメた事抜かしてんじゃねーぞ！」

遂にステイブに殴り掛かる漢。しかし、その拳は漢より小さいステイブよりも更に小さい金髪の少年によつて頭容易く止められた。

「そこまで」

漢はその少年を見ると先程までの威勢が幻だったかの様にステイブを離して後退し、力が抜けたのかその場に膝を着く。

「お、お前は……」

少年の事を知つてそうだが、少年はその漢を無視して振り返りステイブに話しかける。

「大丈夫だった？」

「いや、大丈夫だったけど。……凄いな。あんな大きな漢の拳楽々止めるなんて」

「これくらい造作もないよ」

「カッケエな！そんなセリフいつか俺も言つてみてーよ。あ、俺ステイブ。助けてくれてありがとうな！坊主は？お前も冒険者になりたくてここに来たの？」

「え？……まあそんな所」

何言つてんだ？

誰だか知らねーのか？

外野が色々噂してるが気にしない。そもそもこの少年が有名だろうが、そんなの昨日この世界に来て今日オラリオに来たばかりのステイブに知る由もない。続けて話しかける。

「なんて名前なんだ？」

「フィン・デイルナ。フィンでいいよ」

「そっか、フィンか。これからよろしくな」

「よろしくステイブ」

2人で会場まで歩き始める。すると先程まで大勢の人のせいで見えなかった会場までの道が、その大勢の人が両サイドに別れた事で姿を現した。何故そんな事が起きたのかは気にせず、フィンとの会話を続ける。

「お互い合格出来ると良いな。フィンはあれを見た感じ戦闘能力では余裕そうだけど年齢をどう見られるかだな」

「はは、」

「いつその事ことサバでも読んじやええ？実は40歳位で病気で身長はここまでしか伸びなかったって。戦いは身長でするんじやねーって言えば通るんじやね？」

「…そうだね。いざと言う時はそうするよ。あ、僕は用事思い出したから先に行つといてくれ。すぐ合流するよ」

「おう！遅刻して試験受けられなかったのは無しだぞ」

手を振って2人は別れた。ステイブは会場へ、そしてフィンは先程の漢の元へ。そんな姿をさつきまで盛り上がって見ていた野次馬は静かに見つめる。フィンはゆっくり歩き、漢の前で立ち止まった。

「スネイク・ダースだな。元ティシユフォヌファミリアの副団長だな。7年前にレベル4になったが、数々の問題行動を起こしオラリオから追放。その後の消息は不明。それが7年後の今日ならいきなりロキファミリアに入団試験か。そんな都合の良い話があると思っただのか？」

「俺の事、忘れて無かったんだな」

「忘れる訳無いだろ。お前がした事、オラリオは一生許さない」

「へ、それは光栄だな」

「そもそもどうやって侵入した？」

「簡単だぜ。変装してれば検問にも引つかからない。もつとガネーシャファミリアは指導した方がよいぜ」

「今すぐオラリオから立ち去れ。そして2度と僕らの前に姿を現さない約束しろ」

「残念、アイツの顔、一目見たかったんだけどな」



「…………あの時の罰は既にお前の身体に刻んだ。あの恐怖をまた味わいたいのか？先程の約束、もし破ったら今度はあれ以上の地獄を拝ませてもらおう。正真正銘の命を貴様から頂く」

「怖いねえ。分かったよ。出て行くよ」

「…………」

「そんな怖い顔すんなって」

あばよと言いきり残しスネイクはさっさといった。

「今更なんで戻ってきた。親指が疼く」

## 入団試験

「今日は月に1度の入団試験日。この日の為にロキファミアリアに集まってくれた人数おおよそ総勢300にも及ぶ。その300名が集まってくれたファミアリアの団長を務めている事実を僕は誇らしく思う。知ってくれていると思うがロキファミアリアはオラリオ最大派閥。当然、入団試験を通る事は困難といえる。3ヶ月の間、新たな入団者の報告をしていないのがその証拠だ」

ロキファミアリアの入団試験がとうとう始まった。今、団長からのスピーチが行われている。前世(転生前)では校長のスピーチをまともに聞いた事無かったステイブ。それが今はどうだろう。しっかりと団長の顔を見て耳を傾けている。その理由は団長が、ついさっきまで一緒にいて『用事を思い出した』と言って別れた金髪の少年とそっくりを通り越して本人だったからだ。

「団長だったのな、フィンって。道理で凄い訳だ」

挨拶をしていたのは自分の一回りも小さいながら、自分よりも屈強な漢の拳も止めてしまう、見た目詐欺の強さを持ったフィンだった。あの時は『どんな筋密度してんだ化け物か?』と思ったが、ロキファミアリアの団長ならば入団を受ける様な三下の拳を止めたのも納得出来る。

「僕らがここまで強くなれたのは種族でも才能でも無い!誰よりも強固な心、つまり覚悟を持っていたからだ!何者にも屈指ない鋼のメンタル!勝利をもぎ取る強い意思!それさえ持つていればいざ僕達の所まで登って来れるだろう。皆も今回の試験に何が何でも合格するという覚悟を持って臨んで欲しい。願っているよ、君達の中から合格者が現れる事を。以上だ」

フィンがスピーチを終了させると同時に、彼のスピーチに感化された受験者達はこぞって雄叫びを上げた。右手を天に突き上げて自分の存在をアピールする様に。

「うおおおおおー!」

ステイブも一緒になって雄叫びを拳を天に突き上げる。しかし、

そうする事で空腹ゲージがまた半分減って残り7.5となつてしまつた。それに気付いたステイブはスローモーションの様にゆっくり腕を下ろし表情を沈ませた。

「また減つた……」

司会は場の空気を静めると、試験の説明に移つた。

「試験方法の説明に移ります。開会式が終わり次第、受付する際に言い渡された会場前にお集まり下さい。会場前に着きましたら、会場で係員を配置しておりますので声をかけて番号を受け取つて下さい。係員に番号を呼ばれた方は指示に従い中にお入り下さい。皆様には中の試験官と戦つてもらいます。試験終了後、係員が出口までご案内しますので帰宅してもらつて構いません。後日、合格者には書類にてご連絡いたします。

最後に、ロキファミアリアの試験内容は他言無用でお願いします。それでは皆様のご武運をお祈りします」

司会が言い終わると同時に300名の受験者が自分の会場へ行こうと動き出す。人を押しのけてまで会場を目指す者もいる。急いでも結果は変わらないのに何を急ぐ必要があるのだろうか。自分が試験官を1番に驚かせたいとでも考えているのだろうか？

もみくちやに遭いながらもなんとか会場に辿り着く事に成功。係員に声をかけて番号を貰う。19番だ。7つ会場があつて受験者は総勢300だから会場事に40人強と考えると真ん中より前の方になつた。

遅い、ひたすら遅い。もう1時間は経っているそれなのに自分の番はまだ来ない。いつになつたら自分の番になるのだろうか。

「デイ●ニーかよ。何もしない時間が1番苦痛。これなら急いだ理由も納得だわ」

「19番。順番だ」

結局順番が回って来たのはそれから1時間後だった。その間ひたすら突っ立ったまま待たされ、ステイブの精神は既にゴリゴリに削られていた。削られたのは何も精神だけでは無い。空腹ゲージもまた1.5減って現在6。テンションはガタ落ちだった。

「やつと出番かよ」

「19番いないのか？いないなら試験放棄として不合格に…」

「チツ、はい！いますよー！」

「早く返事をしないか。全く…。中には試験官が待っている。一言二言言葉を交わした後、試験開始の宣言がされるからそれが合図だ。自分の実力を出し惜しみせずに最初から全力を出してくれ。後がつつかえているんだ」

「最初つからクライマックスね。了解」

「では健闘を祈る」

係員がドアを開き、1人で中に入る。係員は会場の外までの係なのだろう。会場は10m四方となっていた。その空間にいるのは自分以外に2人。恐らく試験終了後の案内をしてくれる係員のひと、フィンだった。

「さつきぶりだね」

「フィンが試験官かよ」

「まあね」

笑顔で言葉を交わすフィンの腰には模擬刀が据えられていた。

「僕が団長で驚いた？」

楽しそうに話すフィンの姿は子供そのもの。でもこんな立派なファミリアの団長をしているんだ。シヨタジジイに決まってる。シヨタジジイとか誰得だよ。腐女子しか好かねーよ。やるならロリババアにしろよ。

「当たり前だろ。受験者だと思ってたらまさかの大企業の副社長

だったなんてな」

「君こそ受験する所の幹部の名前と顔くらい知っておくべきだと思うけど?」

「しょうがないだろ。今日オラリオ来てギルド立ち寄ったら午後にここの入団試験があるって聞いたから受けただけだし。ここだから入りたいなんて動機は無いんだよ。そもそも探索系ファミリアって事以外どんなファミリアか知らねーし」

「それ、面接だとしたら最悪だね。装備といいメチャクチャだな君って。まあ良いや。後がつかえてるし早く試験済ませようか。試験は簡単、僕を倒してくれ。勝つためなら不意打ちでもなんでもやってくれて構わない。ま、食らうつもりは無いけど。たわいも無い会話がしたいなら合格した後には沢山してあげるから早く構えて」

「へいへい」

あんなに待たされてすぐに試験と言われてもイマイチ気に乗らないステイブ。空腹ゲージも制限まで半分切っているのだ。ここまて来ると本格的にお腹が空いて来た。気持ちを切り替えるのに時間が欲しい。ダラダラと腰の剣を抜こうとする。しかし、剣を抜く途中でフィンが動く。

「……ナメてるな」

「」

フィンが喉元目掛けた突きで一直線に向かってくる。ステイブは抜き途中の剣をフィンの模擬刀と自分の喉元の間を滑り込ませてなんとか直接打ち込まれる事は回避出来た。しかし、突きの衝撃までは殺せず後ろに吹っ飛ぶ。

(ガトツゼロスタイル)

各国の○○シリーズが頭に過ぎるが、そんなふざけている場合では無い。フィンは追い詰めた獲物にトドメを刺すライオンの如く距離を詰めて来たのだ。

「ちよ待つて!ストップ!ちよ待てよ(イケボ)、タイム!タンマウオッチ!摩訶鉢特摩!へブンスタイム!ザ・ワールド!ポーズ!」

「……何だい?君は戦闘中に命乞いをするのか?」

必死の中断の懇願をどうにか耳だけでも傾けてくれた。しかし、油断は禁物。このままではギリ貧も良い所。このままではやられて不合格になる。フィンを見るに怒っている様だ。どうやら知らず知らずのうちにフィンに不快感を与えてしまったのだろう。

（このままではまずい。俺はポンプだ！血液よ！勢いよく加速しろ！酸素をぶん回せ！脳よ！加速しろ！思考を巡らせろ！最適の言い訳を産み出す為に！

ギアセカンド！

最適の……言い訳は………っ！)

ステイプはある物を思い出した。

『でも、ルールが違うという事は新アイテムもあるって事。これはどう使おうかな』

（あの時、もう1つのチェストに入ってた新アイテム。今こそ出番だ！)

ステイプは頼む気持ちを忘れず、尚且つ下手にならない様に話しかける。

「フィン、命乞いって大袈裟だぜ。これは試験なんだ」

「覚悟を持って臨めと言った筈だが？」

「覚悟なら決めてるさ。なあフィン、お前………試験開始の宣言告げて無いよな？なら今は試験外になる。これはズルくないか？こっちは準備してなかったから不意打ちでもあるし。それ良くないと思うんだが？」

「……………」

「理由は分かんないけどさあ、俺が怒らせたのは悪かったよ。でも試験とかそういう所に私情を持ち込むなんてあり得ないんじゃないかねーのか？」

今の状況を簡単に説明すると、一流ファミリアの団長がムカついた受験者に試験外で暴行を加えた。冒険者にもなった事無い受験者を……オラリオのルールとか知らないけど重罪になるんじゃないの？」

フィンは自分の部屋からステイブを初めて見た時、彼に可能性を見たと感じた。『この男はいつか自分では予想もつかない事をしてくれるのでは無いか』と。身につけている装備からして普通とは何処かズレてる。そしてスネイクに言ったあの考え方。『冒険者は鍛冶師の傀儡人形』と言う言葉。鍛冶師視点の考え、冒険者じゃない、異端児だからと決めつけければ話は速い。だが、フィンにそうと決めつける事は出来なかった。それは多数派意見、しかも屈強な漢を相手に1人で臆さず面と向かって宣言したからだ。それこそ『何者にも屈しない』を体現しているでは無いか。

それがどうだ？試験官として対峙すると受ける印象は全然違った。返事は適当、敵が目の前にいてもダラダラと剣を抜く。やる気が感じられない。あの言葉を言った人と同一人物と思えなかった。しまいにはフライングで仕掛けた攻撃を盾に脅しに来る。これには失望した。元々は入団させる気でいたが、こんな卑怯でいい加減な男はロキファミリアに入る器では無い。自分では予想もつかない事というのはスネイクみたいなヤバイ方向での事なんだろう。

「……それは悪かった。望むのはなんだ？ロキファミリアへの入団か？」

勿論これは聞いたただけだ。もし要求して来ても入れる気は毛頭無い。この場で追い返す。こんな奴を入れるなんて100害あって1利無しだ。ギルドに罰金を要求されても喜んで払ってやる。

そう思っていた。しかし、彼が要求したのは予想とは全く別の事だった。

「いや、そんなので入団するのは嫌だから別に良い。それよりさっきのは既に試験中になってた事にして目を瞑るからさ、ポーシヨン飲ましてくんね？」

## 半月ぶりの○○○

「ポーシヨン飲ませてくんね?」

それが、ステイブがフィンのフライングを許す際に提示した条件だった。てつきり入団させると強要してくるのを予想していたフィンだったが、その予想は大きく外れた結果になった。なんの脈略も無い言葉に思わず聞き返す。

「ポーシヨンだつて?」

「そ、ポーシヨン。俺さ、今朝に無一文でオラリオに来たから昼飯も食って無いんだよ。しかも2時間も何もせずただひたすら待たされて心身共にヘトヘトで。腹の足しになるか分からんけど、栄養補給になりそうなのは出かける前に作ったポーシヨンくらいでさ。味見してないけど美味しく出来てると嬉しいなあ」

なんか白々しい雰囲気醸し出すステイブだが、そんな事は気にせずに会話を続ける。

「そういうのは普通試験前に飲むのが常識だと思うが」

「しょうがねえだろ。試験受ける直前に飲んで力溜めしようとしたら係に急かされて飲めなかったんだよ」

「……君、我儘言ってる自覚はあるのか?」

「安心しろ、自覚してる。てか今はその我儘を言う時間でもあるだろ」

「全く……特別だぞ」

「…サンキュー」

ステイブはポーシヨンを飲む事の許可を貰うと微妙な表情を浮かべてからチビチビと飲み始めた。フィンは『さっさと飲め』と思いつつながらステイブを見ているが、がしかし、彼を見ているとある違和感に気付く。彼との会話に出てあった存在する筈も無い言葉が紛れている事実だ。

(…ん?今ステイブの言葉におかしな部分が無かったか?確か『無一文でオラリオ』じゃなくて、『心身共にヘトヘト』でもなく、『ポーシヨン』…!そうだ!ポーシヨンだ!ステイブはポーシヨンをどう



やって手に入れたと言った☒僕の聞き間違いじゃなければ『今朝出かける前に作った』と言ったぞ。そんな馬鹿な☒あり得ない！』

フィンの言う通り、ポーションは一般人が作れる代物では無いのだ。ポーションを作るには専用の発展アビリティが必要になる。ステイブはそもそも、レベルアップしてる以前に恩恵そのものを貰った事が無い。受付でそう言っていたとの報告がある。だからステイブがポーションを作れる筈が無いのだ。

そんな思考を巡らすフィン。しかし、彼と同じくステイブも思考を巡らしていた。

（あら？もしかしてこの世界って一般人がポーション作っても、なら不思議じゃない世界なの？だからどうぞお飲み下さいって態度なのか？普通こんな瞬時に人体を修復する薬を誰も彼も作れる筈無いだけだな。でもこの世界はそれが普通ってんだから仕方あるまい。色々と化学やらが発展してるんだろう。いや、全てお見通しか？こつちの事ちよー睨んでくるし。しゃーない。動くしかねーか。お願いだから突っぱねないでくれよ。神様仏様稲〇様）

ステイブは様々な神々に作戦が成功するお祈りをしてからフィンの話し掛ける。

「うーん、美味しいんだけどイマイチポーションの効果が分からねーな。なあ、フィン。試験のついでだし俺のポーションも評価してくれねーか？いつも使ってるだろうから俺よりよっぽどポーションの効果にはうるさいだろ。それにいくら強いフィンだからって2時間もぶつ通しじゃ多少なりとも疲れはある筈だからな。ま、これも実力の1つって事で審査してくれや」

「…そうだね。これも試験の一環という事で頂くよ」

フィンはポーションを受け取った。これも試験の一環だと。何よりの気になった。このポーションの効果を。一括りにポーションといっても様々な種類がある。例えば、いつもロキファミリアのメンバーが愛用しているディアンケヒトファミリアのポーションは、値段が高い分回復の効果も、飲み易さも良く、流石の一言だ。逆にミアハファミリアのポーションは何段が安くお手軽に思えるが、その実態は

水で薄めて傘増ししている事が一流冒険者の舌に掛かれればすぐ分かる。水で傘増ししている分、ディアンケヒトファミリアのに比べて粗悪品と言わざるを得ない。

この様に、作る人によって温度、効果、味、など様々な特色がある。フィンはおラリオ内で売られているポーションは全て頭の中に情報をインプットしている。勿論外のポーションなら流石のフィンも分からないが、それでも効果は知る事が出来る。彼の飲んでいるポーションが本物で、彼が作ったのだとしたら入団を断る理由は無。質によつてはこれからは彼にポーションを作ってもらい、浮いたポーション代を別の所に割く事が出来る。そう考えれば、あのいい加減な性格なんて痛くも痒くも無い。

(もしステイブが本物だとしたら、また僕は悲願に近づく事が出来るだろう)

そう思い、貰ったポーションを一気に飲み干した。それを見たステイブは頭を抱えて信じられない物を見るかのような目でフィンを見て叫んだ。

「あー！ー！フィンの大馬鹿野郎ーっ！」

「ッ?!」

唾を撒き散らしながら怒号を響かせたステイブ。突然の怒号にフィンはむせてしまった。

「ゲホッゲホッ、ん、んん！いきなりなんだ？」

しかし、フィンの問いに答えるより前に、ステイブは力尽きたかのようにその場に膝から崩れ出した。フィンが『本当にどうしたんだ？』と声をかけると静かに呟き始めた。

「自分が何やったか分かつたのか？」

「は？ポーションを飲んだだけだろ。君が飲めって言ったんじやないか」

「それは別に良いんだよ。問題は飲み方だ！お前はどうかやって飲んだんだ？説明してみろ」

「どうやってって、普通に口付けて「それだーっ！」ええ？」

「お前は間接的とはいえ俺の唇を奪いやがって……ウツ☒……チク

シヨウ」

終いには泣き出したのか肩を震わせているのが側からでも分かる。フィンはいあまりの阿呆らしさに空いた口が塞がらない。結局飲んでみたポーシヨンもただの水だった。ホラ吹きここに極まれりだ。フィンは相手にすんのも馬鹿馬鹿しくなっていた。何故こんな男に可能性なんて見てしまったのだろうか。

「効果は？」

「え？」

地面にへたり込んでいるステイブは、そんな状態でもポーシヨンの効果を聞いて来た。

「ハッキリ言っただの水だよ。なんの価値もない」

「そうか……失敗作……慌てたから」

失敗作以前の問題だろと思うフィン。だが、そんなフィンに後ろ向きで新たなポーシヨンを渡して来た。

「それは完成形だ……昨日時間かけた……から。……評価してくれ」

「またなのかい？これ飲んだら戦闘に戻るからね」

そう言っただけでフィンは投げやりな感じでポーシヨンをガブ飲みする。またしても回復した感じはしない。

「やっぱりニセ……モ……ノ……」バタ

フィンが急にフラフラしたかと思うとその場倒れ出した。

「団長」

慌てた係員がフィンに駆け寄る。だが、それより前にステイブがフィンの首に剣を当てていた。

「へへ、しょーり」

「貴様!!？団長から離れろ！「む……り」あ？」

ステイブをフィンを暗殺する為に紛れ込んだと思ひ込む係員。だがそう思うのも無理はない。彼のポーシヨンを飲んですぐにフィンがフラフラと倒れたのだ。そして首筋に剣を当てられている。刺客と思うのが当然だろう。その彼が無理と発した。何が無理なのか。それは直ぐに分かった」

「オボロロロロロロロロ!!」

ステイブがフィンの顔面に大量のゲロを吐いたのだ。それもおよそ10分程吐き続けた。2人の周りにゲロの池が出来ていた。係員はこの日を一生忘れないだろう。自分のファミリアの団長が顔中ゲロまみれに汚され、そしてゲロを吐いた本人が未だに吐き続けながらフィンに覆い被さっている。彼等のは服はゲロまみれとなっており、ゲロの池の酸っぱい匂いがこっちまで漂ってくる。この光景を見て係員が思った事は1つだった。

(今すぐにも係員を辞めたい)

命懸けの戦いに正々堂々なんて言葉は存在しない

プワーン

今、酸っぱい汚物の臭いが会場中の空気を汚染していた。臭いには勿論発生源が存在し、その中心には今もなお何も知らずに眠っているフィンと、

「ウツ×ウオエエエー！」

未だにフィンに覆い被さりながら彼に向かって吐き続けているステイブがいた。

そんな中、自分の所属派閥の団長が、永遠にも思えるような拷問を受けている状況にも関わらず、係員の彼はというと、

（俺は何も見っていない。俺が見ているのは白い壁だ。断じて全身にゲボを身に纏った勇者（墮）なんて見ていない。鼻を摘んでいるのは…えつと、あれだ。この状態で鼻を噛もうとすると耳がツーンってなるだろ。それが癖になっただけだ。決して酸っぱい臭いに耐えられないからじゃ決して無い）

フィンを助ける訳でも無く、かといってステイブを咎める訳でも無く、ただこの光景から目を逸らして鼻を摘み、壁を眺めていたのだ。

「ん、僕は一体って臭っ!? 一体なんだ!?!」

そんな時、ゲボの山に埋もれているフィンがやつと目を覚ました。目を覚ますと最初に酸っぱい臭いが充満している事に気付く。今すぐこの場を離れようと体を動かした。するとベチャベチャ、又チャ又チャと音が鳴る。それも自分が体を動かすのに合わせて。

「なんか腕についてる。これは? ……!?!」

体中に付着している理解不能な物体。しかしそれが理解し難い汚物だと、自分が形容し難い惨状に陥っている事を認識するまで時間はかからなかった。次の瞬間、フィンの目はこの世の絶望を経験した様な目が変わってしまった。

「は、はは、ははは。僕は汚れている。元々汚されていたけど、それとはまた別の意味で汚された。はは」

「だ、団長! ウツ…今、助けに行きますからね!」

係員はフィンが起きたと分かるや否や、虚の目をしているフィンを助ける為、耐え難い異臭の中を突っ切ってフィンを救出に出迎え。

「団長！大丈夫ですか団長」（団長臭いです）

「はは………これを見て大丈夫だと思うかい？」

「大丈夫です！団長は爽やかなまんまです！」（団長汚いです）

「…それは本音かい？こんな嘔吐まみれの醜い姿を見ても本当にそう思うのかい？」

「ハイッ！」（ごめんなさい団長、今の貴方のお姿は勇者とは似ても似つかない、朝まで飲んだくれているプータローのお姿に匹敵します。そしてなにより臭いです）

「僕はロキファミアリアの団長なのに、勇者なのに。きつと今日の事はきつとファミアリア中に知れ渡る。一体、明日からどんな顔してみんなと会えば良いんだ」

「安心して下さい！団長の醜くて臭い姿は永久にロキファミアリアに語り継がれます！」（安心して下さい！この事は墓まで持っていく所存です！）

「君建前と本音逆になってるよ！隠す気ゼロだよね！バラす気満々だよね☒」

「それより団長！あいつが何を飲ませたか問いたださなきや！」

「凶星だよ☒凶星だから話すり替えようとしたな！」

「さあ、何の事だか。それより団長、早くその汚物を服ごと脱ぎ落として下さい。いい加減その臭いを相手に意識して口呼吸するのも疲れるんで」

「今ぶっちやけたな、取り繕うの面倒臭くなつたな！」

「臭いのは団長でしょ」

「なんだと!?？団長に向かってなんだそれは」

という感じの軽めの漫才をしながらこの原因を作ったステイブの元へ歩き出す。しかし、流石は根本の原因。フィンから漂う異臭の更に上位の異臭を放っていた。

「臭い、これじゃまるで団長が子供みたいだ。………色んな意味で」  
「複雑な気持ちだったけど最後の言葉で殺意を覚えたよ。後で個人

レツスンだからな。徹底的に絞ってやる」

「個人レツスン!?!? 徹底的に絞り取ってやる!?!? 勘弁して下さい! 自分はノーマルです!」(性癖的な意味で)

「何を言ってるんだ。君は既にアブノーマルじゃ無いか」(人として)

フィンの言葉に思わず後退りをする。その際に尻をガードする事を忘れずに。そんな係員をニヤニヤと見るフィンに、係員は更なら恐怖を覚える。

微妙なすれ違いが起きる中、嘔吐物の中心にいるステイブがやつと立ち上がった。

「やつと状態異常が取れた。やれやれ、木材やらなんやらめあの時より持ち物が増えたから倍以上の苦しみを味わう事になったじゃねーか」

「止まれ、こちらを向いてゆっくり両手を上げるんだ」

「その前にこれ…」  
「早くしろ。さもなければ殺人未遂とみなし、この場で即殺処分とする」

係員から真剣を借りたフィン。全身から殺意を放っているフィンに、従わなければ命が危ないと悟りゆっくりと両手を上げた。指示に従ったお陰でとりあえず真剣が牙突してくる事はなかった。

「一体僕に何を飲ませた? 正直に言え」

「それは睡眠ポーションです」

「睡眠…ポーションだと?」

聞いた事の無い種類のポーションを言われ、フィンのみならず係員も頭に?を浮かべた。そんな2人にステイブが説明する。

「そうです、睡眠ポーションです。その名の通り飲んだ者を少しの間眠らせる事が出来るポーションです。効果は10分間。その間、如何なる刺激を受けても起きる事はありません。例外として外部からの助けて快眠ポーションか、エリクサーを飲ませて貰えば起きる事が出来ます。副作用や眠る以外の効果は持ち合わせていませんのでご安心下さい」

「そのポーションを君が？」

「はい。つて言つても今作れて言われても出来ませんけどね。作る道具はありますけど材料が無いんでね」

「……まあいい。それが本当かは直ぐ分かる、が一応聞いておく。君が飲み、そして僕に飲ませたポーションは本当にただの失敗作か？」

睡眠ポーションは分かった。だが、その前に飲まされたポーションは本当に回復ポーションの失敗作だったのか？もし違つていてもステイブが飲んでる事から体に害ならある物では無いだろうが一応確認の為に問う。

「あ、それはただの水です。回復ポーションの失敗作じゃなくて今朝入れた水道水です」

ポーションですらなかった。

「なら聞くが何故そんな物を僕に飲ませた？これは試験だとお前も分かつている筈だ」

これは当然の質問だった。戦闘の試験で毒を盛つたからだ。普通なら即失格。それどころかギルドに報告されれば今後どこの入団試験を受けようとしても門前払いになる可能性大だ。何故そんなリスクを背負つてまでしたのか氣になった。ステイブの発言を信じるとロキファミアに酷使する理由は見つからないからだ。

ステイブはこの問いに『当たり前だろ』とでも言う表情で答えた。

「だつてお前言つただろ。『何が何でも合格する覚悟を持って』つて。外の係員も全力でつて言つてたしな。だから道具を使った。悪く思うなよ。これが俺の全力だ。自分の道具を最大限に利用して勝利をもぎ取る。正々堂々の勝負？阿保らしい。そんなのは勝手にやつてろ、そして勝手に死ぬ。モンスター相手に命のやり取りするんだ。そんな馬鹿正直な事やつたら命がいくつあつても足りねーよ。当たり前の事だ。ま、だからゲスイ考えは一切持ち合わせて無いから。特に罪も無い一般人から金品強奪なんてクズの真似事は死んでもしないつもり」

この言葉を聞いて内なる殺意が完全に吹き飛んだフィン。最近の



受験者に持ち合わせていない物を持つていたからだ。最近の受験者はみな正々堂々過ぎる。俺はこれで出来ると思ひ込んでいたのだ。だが、冒険者はそんな甘っちょろい世界じゃない。英雄譚なんかで描かれてるキラキラした世界では無い。それを分かっている。かと言つてクズつて訳でも無さそうだ。……人にゲロを撒き散らす事さえ抜けば。

合格か不合格。迷った末に出した決断は、

「ボン、お前は外の係員に伝えてくれ。この会場での試験はここままで、残りは他の会場に回ってくれと」

「了解です。てかやつと俺の名前言つてくれましたね。それと団長は何処へ？そして彼は？」

「僕とステイブは風呂だ。これからロキに会うのにこの臭いはやばいだろ」

「それつてつまり……」

「ああ、とりあえず合格だ」

「マジで!?!?よっしやあー!」

合格、これ程嬉しい二文字は沢山あるがそれでも大変喜ばしい事だ。ステイブもガッツポーズが出た。

「いやー、マジでヒヤヒヤしたー。ゲロぶちまけた瞬間に強制的に失格にされるかと思つたわ。いやー、ごめんな本当」

「平気さ、これから僕があれ以上の地獄を君に見せてあげるから」  
凄い笑顔で言うフィン。しかし、とても怖い笑顔だった。

「あ、お、俺やつぱりしつかり試験受けてないから自主的に失格に「逃がさないよ」ギヤーツ!!?」

風呂場へ行く道にステイブの叫び声が響いたのだった。無事一次試験を突破したステイブ。一次試験の次は二次試験。果たしてロキとの面接をクリアする事が出来るのか？

「ヒツ!?!?彼の叫び!?!?やつぱり団長つてそつちの気が!?!?」

## 悪魔の証明

「ふあ〜、生き返る〜。ババンババンバンア〜ビバノン。いい湯だな、アハハン。ここはオラ〜リオ、ロ〜キの湯……違うな」

流石はオラリオトップクラスのファミリアだ。風呂の広さも銭湯並みの広さを誇る。これだけ広い風呂場を貸し切り気分で使えるのはとても気持ちが良い。落ち込んだ気分や、汚れた身体を綺麗さっぱり洗い流すのは勿論、温かい湯船と一緒に独占した気分にも浸かれる。唯一の欠点は歌に合わない事だ。

「やっぱり風呂は良いもんだな〜」

「喜んでもらえて何よりだよ。それより、聞きたい事があるんだが良いかい?」

「いつでもどうぞ〜」

「君が隠している能力を教えてください」

フィンは聞き出そうとしていたのだ、ステイブのまだ見ぬ隠された能力を。この男がポジションを作れるのが本当かどうかは置いて、他にも特別な能力を持っていると思うのだ。根拠は無い、親指が疼く訳でも無い。でもそう思うのだ。しかし、彼が果たして素直に教えてくれるかどうか。

「別にいいぜ」

しかし、意外にも彼はアツサリOKを出してくれた。こんなにすんなりいくとは微塵も思っていなかった。現実的な考え方をすること男は『仲間になるって決まっても無い奴にこれ以上素性を教えられない』、もしくは『教えても良いけどその代わり入団させるのが絶対条件だ』とでも言ってくるかと思っていた。いや、これから条件を提示してくるかも知れない。そうやって思考を巡らすフィンを見たステイブはニヤリと笑う。

「なんだその表情。『教えるのは入団させるのが条件』とでも俺が言うと?」

「察しがいいね。正にその通りさ」

「おお、ハッキリ言うんだな。でも残念。対価なんか要らねーよ。無条件で教えてやる」

「…それは本当か？」

「そうだよ。元々能力を隠す気はねーもん。まあだからって自ら言いふらす事はしねーけど」

訊かれたら答える。そうじゃないなら答えない。例えるなら、ゲームの攻略法を友達に訊かれたら教えるが、自ら攻略サイトに載つける事はしない、そんな考えだった。

まさかの本当に無条件で知れるとは思わなかった。でも彼からしたら、教えようが教えまいが同じ事だったのかも知れない。この能力を知れば向こうから入ってくれと懇願してくると。

「俺の能力は簡単に言えば収納と作製かな。両方とも名前の通りだ。収納はあらゆる物を俺しか知らない場所に保管できる。勿論瞬時に取り出す事も可能だ。作製は武器やアイテムを作る事が出来る」

「作製は武器も可能なのか？」

「ああ、作製時間は5秒あれば余裕かな」

「……」

作製時間を聞いたフィンは呆れて物も言えなかった。こんな大ホラを吹くとは。こんな嘘はロキに確認しなくても分かる。何処の誰かが武器を5秒で作れると言われて信じるのだ。これでは真剣に聞いた自分が馬鹿みたいじゃないか。あれだけ鍛冶師を擁護しておいて、鍛冶師を舐め腐ったこの発言。本当にデタラメ男だ。

しかし、ステイブにとってフィンの反応は大方予想通りだった。急にそんな事言われたって信じられないのも分かる。信じさせるには実際に見せるしか無いと。

「まあ信じられないのも分かるよ。だから実際に見せてやるよ」

そう言うとは何処からともなく30cmちよいの立方体の木製ブロックを取り出し、そのまま足元に置いた。当然、彼の体に隠してたと言うにはあまりにも大き過ぎる。このブロック取り出した能力がさつき言っていた収納の能力なのだろう。

「これが作業台だ。アイテムを作る時は基本的にこれを使う」

この作業台があるからどうだって言うんだ、それがフィンの作業台に対しての感想だった。あの台の上で作業したからって作製時間が短縮されるなんて、そう思っていた。

「チヨチヨイのちよいつと！ほら完成だ」

「いつの間に?？」

瞬きで瞼が閉じて開くまでの一瞬の内に、何も無かった筈の彼の手にはいつの間にも剣が握られていた。

「ほれ」

「あ、ああ」

超常現象を目にし、動揺しているフィンにステイブは出来たてほやほやの剣を渡す。受け取った剣は真剣特有の重厚感を有していた。紛れもなく本物。フィンは2、3回素振りし、握り心地や振り心地を確認する。

「そいつは丸石で作った石剣だ。そりや鉄で作った剣には性能面で劣るが素材がそこら辺の石だから簡単に作れて結構使い勝手は良いんだぜ。これでも斬ってみろよ」

ステイブはフィンの方向に木材を放り投げた。それをフィンは手持ちの剣でスパツと斬り落とす。

「どうだ?」

「悪くない。切れ味も中々の物。ただの石でこの出来、メインウエポンには成り得ないが、サブウエポンなら合格だ。更に良い素材を使えば一級品になるだろう」

「なら良かった」

「他の武器も作れるのか?例えば槍や短剣、斧、メイス、弓、矢、ボーン、杖は?」

「杖以外は一応作る事は一通り可能だが」

「そうか、あれだけ速く作れて、色んな種類の武器を作れるならまず間違いなく合格だな」

ステイブ<sup>この能力</sup>さえあれば遠征の成功率が格段に上昇する。今まで前もって持参していた予備の武器を用意する必要も無くなる。素材さえ持っていれば足りなくなった分だけその場で補充する事も可能に

なるからだ。だが、1つ問題があった。

「本当に作っているならな」

そう、この武器が果たして本当に彼の手で今この場で作られたかどうかだ。

「何言ってるんだよ。見てただろ」

「ああ、見てたさ。何も持っていなかった筈の君の手にいきなりこの剣が現れたところをね」

「それは…」

「勿論これを君がこの場で作った可能性が無いとは言っていない。だが、それと同じくらい、又はそれ以上に違う可能性もあると言っているんだ。例えば予め買っていた剣を収納しておき、作ったと思わせて収納していた剣を手元に出す。剣を作る過程が見れないんだ。疑われるのもしょうがないだろう？まあ、作製じゃ無くて収納の能力がある事は証明出来たけどね」

「ッ、ならどうやって証明すれば良いんだよ。インベントリを空にしたって言ってるから作っても、『隠し持ってたヤツ』って思われるんだろ！」

結局は見せても同じ結果だった。クラフトの能力は作るまでの過程が存在しない。そして、彼に収納の能力がある事で作製の有無を証明出来ない。それだけじゃ無い。ポーシヨンの件も嘘じゃ無いのに嘘をついたと思われる。作れないのに作ったと言い張ったと思われる。ポーシヨンは見せれば良いのだが素材が無いから作れない。例え真実を話しても証明する手段が無い。これ程悲しい事が他にあるだろうか。唇を噛みちぎる勢いで噛み締め、風呂の床を殴りつけて悔しさを露わにするステイブ。そんな彼に先程厳しく言ったフィンが声を掛ける。

「簡単な事さ。ロキの前で話せばいいんだ。神は人の話が嘘か真か見分ける事が出来る」

「!?それは本当か？なら俺がロキの前でこの事を話せば信じてもらえるのか？」

「本当だったならの話だけだね。最初からそうすれば良いだろうって

思うかも知れないけど事前に知らないのは良く無いからね」

「くくくくつ！よっしやああああ！」

「あ、その時に収納の限界量も説明して。収納があるって事は知れたから」

よっぽど証明出来る事が嬉しかったのか思わず高々と声を上げる。それと同時に込み上げて来たモノと一緒に撒き散らした。

「……頼むから詰まらせないでくれよ。後治ったら後片付けもよろしく。僕はお先に上がらせてもらおうよ」

## 最終試験&結果発表

「それじゃ始めるで。最終試験を」

「はい、よろしくお願いします」

とうとう始まった面接試験。本来ならロキと受験者の一対一で行うのだが、今回は彼女の横にフィンが同席していた。

(なんでいるんだよ)

フィンが何故ここにいるか、それは担当していた受験者を幹部達に任せて自分の手が空いたからである。既に掃除を終えて綺麗になったであろう会場に戻り、彼等<sup>幹部</sup>に回した受験者を呼び戻して試験を再開しようと思えば出来る。だが、折角なので彼等幹部達に任せる事にしたのだ。

そもそも2日かけてとは言え、毎月100人程の人数を今までフィン1人で対応していたのが間違いなのだ。これからはリヴェリアやガレスだけではなくテイオネ達若い幹部達にも手伝ってもらう事にフィンは決めた。彼女達はまだ20前後で若い。しかし彼等だつてロキファミリアの立派な幹部なのだ。これまでは主に前線で活躍してもらっていたが、これを機に徐々に裏方も熟す人間になってもらいたい。勿論、今後とも最古参の3人でサポートをしていくつもりだ。結果、役目が無くなったフィンはロキと一緒に最終確認の審査をする事にしたのだ。

「それじゃまず名前と年齢を教えてや。以前に他のファミリアに入団しておつたらレベルもな」

「ハイ。私はステイブと言います。姓はありません。歳は今年で18になりました。他のファミリアに所属していた過去はありませんので、レベルは0、もしくは無いと思います」

(それにしても本当に敬語なんて使えたんだな)

背筋を伸ばし、しっかりとロキの目を見るステイブ。一次試験の時とはえらい違いだ。風呂で言つてた事は本当だったのだ。

『え？敬語？使えるよ。当たり前じゃん』

『……僕は一度も見てないんだが？』

『だって初対面で歳下だと思ってタメ口で話してたのに指摘しなかったから気にしないのかなって。团长って分かった時は流石に敬語で話そうと思ったけど、待ち時間が長くてそんな事忘れたわ』

『たったの2時間だぞ。それくらい待てないのか?』

『長ーよ。寝たりスマホがある訳でもねーし限界振り絞っても1時間か限度だわ』

『すまほ?』

『ああ、こっちの話。兎に角敬語で話せばいいんだろ。流石に俺だって神様相手にタメ口なんてする気はねーよ』

「…嘘は言っていないみたいやな。なら次からの質問はフィンに頼むわ」

「僕が?」

「当たり前やろ。状況を把握してるのはフィンなんやから、ウチが聞くよりええやろ」

「それもそうだ。事前にロキにある程度伝えていたとしてもそれを見ていた本人が聞くのが1番良い。」

「ゴホンツ、まず最初に君はポーションを僕に飲ませたね。睡眠ポーションを。アレは少なくともオラリオでは存在しない代物だ。君が作ったのか?」

「はい、あの睡眠ポーションは自分で作った物です」

「それじゃ君は武器を作れると言っていたが、君の剣や斧も自分で作ったのか?」

「はい。自分で作りました。フィン团长に風呂場で拝見してもらった方法と同じクラフト台で素材を組み合わせて作りました。作製時間は数秒です」

「なら収納は?マジシヤンの様なタネがある訳じゃなく、正真正銘の能力なのか?」

「そうです。能力は単純で色んな物を出し入れ出来ます。試験の際の武装が今無いのは捨てたからでは無く全て収納したからです」

「……」 スツ

「……」 フルフル



フィンの目配せにロキは目を伏せて首を横に振った。それを見たフィンは顔を伏せて『そうか』と小さく呟き、手をは震わせる。それを見たステイブは冷や汗をかいた。

(え!? 俺なにかした!? なんも嘘ついてない筈だけど!)

「ステイブ…」

「はひっ!!?」

内心テンパリ過ぎてて嘔んでしまった。普段なら恥ずかしがるのだが、今そんな考えは持ち合わせる余裕は無い。今の彼の脳を埋め尽くしているのは『焦り』と『恐怖』。何故真実を話したのに嘘だと思われたのか。それも人の言葉の真偽を見抜ける神様に。なによりその神様があの悪名高い男神ロキ。きつと嘘をつくのは好きでも、嘘をつかれるのは極度に嫌う筈。死よりも恐ろしい罰を与えられるのでは無いか。

そう考えてるステイブだった。しかし、震えていたフィンの手がガツツポーズに変わったのだ。そして顔を上げるとステイブを見てまた頭を下げたのだ。

「疑って悪かった」

「……………え?」

「だから疑って悪かったと言っているんだ」

ステイブはまだ事態を飲み込めずにいた。ならあの首振りには? 震えた手は?。

「…で、でもさつき首を振って」

「アレは目配せでロキに『嘘は?』って聞いたんだ。そしたらロキが首を振った。つまり嘘についてないって事」

「……」

「因みに僕の手の震えは、君の能力が実在していた事に興奮してただけさ」

(勘違い!!? 紛らわしいな!!?)

安心したのはフィン達に心の中で毒付いた後だった。

「ならポーシヨンの作製方法を口で説明してもらえるかい?」

「実際に見せてもらえばええんや無いか?」

「実は彼は…」

「それは自分がお答えします。ですので先に収納の能力を説明させて下さい」

「なんでや？」

「収納の能力が原因だからです。収納はさっき言った様に物を出し入れする能力です。収納した物ですが団長には俺しか知らない場所と言いました。その場所とは脳内なんです。俺はこれをインベントリと呼んでいます。形ある物体を形無きデータ、情報としてそのインベントリに収納する事、それが収納の実態です」

「……信じ難いが嘘はついてへん。真実やな」

「そしてそのインベントリは箱の様なイメージです。普段は閉じてありますけど取り出す際に必ず中を見る為開ける必要がある。するとどうでしょう。しまった情報を一度に読み取る事になります。インベントリの容量は大きさでは無く数。その数、64×36で最大2304。そんな情報を脳内に送り込まれたらどうなるでしょう」

「そんなもん気持ち悪くなるだけやろ」

「その通り。自分はインベントリを開くたびに体調を崩し、嘔吐したのはこれが原因です。最大数入って無いとはいえ気持ち悪くなってしまうのです」

「そうだったのか」

フィンはステイブが嘔吐した時の事を思い出していた。最初にはポーシオンを取り出した後。2回目は剣を使った後。どちらもインベントリを開く必要があったのだ。

「ポーシオンを作るにも専用の装置が必要であり、それを取り出すという事はインベントリを開くという事。そうすれば神様のお部屋を汚す事になってしまいます。元々材料が不足しているのでこの場でお見せする事は不可能ですけど」

その後はポーシオンの作り方をやインベントリの仕組みを説明した。フィンはこの能力ならサポーターが1人で済むと言っていた。そして、最後の質問であり最重要な質問をロキはステイブに投げかけた。

「ウチのファミリアはな、物凄い仲間思いなファミリアなんや。皆、自分の命を投げ打つてでも仲間を助けだす、そんな覚悟を持っておる。その覚悟が自分にあるか？」

「命を投げ出す覚悟……」

危機に瀕した時、仲間を助けようと動けるか。それが重要だった。遠征では個々の能力よりも結束力が物を言う。個々の力はあってもバラバラな団体はピンチに弱い。それが彼等の考え。

ステイブは考え込む。そんなステイブを見て彼等は思う。この答えはセーフかアウトの2択では無い。そこにファールが存在する。

（最初から命を投げ打つてまで助ける覚悟があるなんて僕達は思っていない。ただ逃げ出したり、見捨てたり、囮にしようという考え、アウトが無ければ良いんだ。まだ覚悟を持ってない、そんなファールな答えを出せたら合格なんだ。いくら君の能力が凄くても考えがアウトな場合、君を拒否せざるを得ない。頼む、ファールになってくれ）

そんな願いはステイブには届かなかった。

「俺さ、その誰かの為に命を投げ打つてって考え方、嫌いなんだよな」

アウト

「そんなの自己犠牲に酔ってるだけだろ。命を捨ててまで誰か助けられたってさ」

彼は最悪の答えを選んできました……かに思えた。

「そんなんで残った奴が喜ぶとも思ってるのかね？どれだけ悲しむか分かってんのかね？特に身代わりで助かった奴。そいつは一生悪夢に出て来るだろうな。自分を助けてくれた、自分の所為で殺してしまった者の顔が。自己犠牲を考える前に最後の最後まで全員で生き残る事を考えろ。それが最善の結果なのだから。……それが自分の考え方です！」

彼は途中素が出るもすぐ様面接用の顔に戻す。彼の答えにフィン達は驚いた。彼はセーフでもファールでもアウトでも無い、全く別の『全員で生き残る』という選択肢を選んだ。

「あ、でも最悪困が必要なら俺が引き受けても良いですよ。大切な鉱石も事前に渡してここに持って帰って来てもらいますけど。安心して下さい。俺、簡単には死なないんで」

「ロキ、終わったよ。合格者ゼロ。全員勘違いが……あつ」  
ステイブが答え終わった直後に部屋に入って来たティオナ。自分が面接の途中で邪魔してしまった事に気付いたのだ。頭に手を置いて苦笑いをする彼女はバツが悪そうに入り口の扉へと戻って行く。

「ごめん、やってるとは思わなかったんだ。すぐ出るよ」

「大丈夫だよティオナ。もう終わったから」

「終わった？」

「うん」

フィンンはティオナの問いに答えるとステイブを見て宣言する。

「合格だ。ようこそロキファミリアへ」

「え……ホント？」

「おお！やったね！青年君！」

久々に誕生した後輩に素直に喜ぶティオナ。

「よろしくお願いします。俺ステイブです。歳は18」

「あたしティオナ・ヒリュテ。ティオナでいいよ。歳は17。よろしくね」

天真爛漫という言葉が大変似合うアマゾネスの少女ティオナ。彼女を見たステイブはフィンの肩を組んで部屋隅に移動する。

「なんだい？」

「彼女アマゾネス？」

「そうだけど？」

「いやー、いくらアマゾネスだからってあの格好は不味くない？布面積少な過ぎでしょ。あの顔であんな服装してたら襲われちゃうじゃん」

「はは、安心しなよ。彼女はレベル5。彼女以上の実力者なんてそうそういないから安心しな。それとも惚れたから心配なのかい？」

「そういう訳じゃねーけどさ」

「ねー、何してるの？」

2人でこここそ話してる所に割り込むティオナ。

「別になんでも無いぞ」

「えー、嘘だあ!」

「なんでも無いって。てか近い」

特別女性に苦手意識が無いステイブも、アマゾネス特有の距離感の近さには照れてしまう。そんな時、ガチャリとドアが開く音がした。振り向くと綺麗な金髪を靡かせる無表情だが絶世の美少女がいた。しかも時刻は5時半で既に夕陽が部屋を照らしていた。それが見事にベストマッチして彼女の美しさに拍車をかけていた。

「……綺麗」

思わず恋愛漫画の主人公が発しそうな言葉が無意識に言ってしまう程、その姿は美しかった。

「……」

しかし、彼女はステイブをみたからか、はたまた綺麗と言われたからか、無表情が顰めっ面に変わりそそくさと出て行ってしまった。それを見たティオナは『待つてよアイズ』と言って追いかけて部屋を出て行った。

「主人公の台詞みたいで嫌なんですけど……俺、何かやらかしました?」

「別に、君が悪い訳じゃ無いよ。彼女にも色々あるんだ」

そう言ったフィンの表情は申し訳無さそうだった。

「アイズさんは渡さへんでステイブ」

「アイズ?彼女の名前ですか?」

「アイズ・ヴァレンシユタイン、それが彼女の本名さ」

「そうなんですか。あ、ロキ様安心して下さい。俺そんなチョロくないんで」

「綺麗って言葉に出てたよ」

「マジで!??でもだからって好きとはならないぞ。アイドル見たからって恋しない様に」

「どちらにせよ彼女をあまり刺激しないでくれよ」  
ステイブは思った。

（フィンとの再会の時といい、今回といい、この世界に会社やアイドルってあんの？）

フィンは思った。

（あれ？テイオナの服装は気にしてるのにロキの服装については何も言わなかったな）

ともあれ、なんだかんだあったがロキファミリアに入団する事が出来たステイプ。これからどの様な事件が彼を待ち受けているのだろうか。

## 挨拶

「今日からロキファミアリアに入団しました、ステイブと言います！今日冒険者になったばかりのヒヨッコですが、皆さんどうかよろしくお願いしまーす！」

パチパチパチパチ

食事時間中にフィンから紹介させてもらい、仲間になったメンバーへ壇上から入団挨拶をする。久しぶりの入団者という事で彼に拍手が贈られた。しかし、盛り上がったメンバーの6割が男性だった。

これだけ見れば『何かおかしい所があるか?』と問いたくなるだろう。だがそれも直ぐに分かる。先程の『盛り上がったメンバーの6割が男性』、これは元々の人数が6:4の場合に成立するのだ。しかし、ロキファミアリアの男女比は3:7。この人数差、更にはレディファースト等という体の良い言葉によって男性陣は常に肩身が狭い思いをしていた。だからこそ、今回入団したのが男で皆喜んだのだ。

さて、話ははずれたがもう一度考えよう。算数のお時間だ。全体で3割しかいない男性陣だが、盛り上がったメンバーの中では6割を占める。残りの4割は女性陣。もうお分かりかな?この挨拶で盛り上がったのは半数(男3割、女性2割)なのだ。

なら他の拍手した者は盛り上がってないのか?答えはYESだ。他の者達が拍手はしていたのは社交辞令。彼女達の笑顔は無い。逆に挨拶が終わると彼女らに笑顔が戻り、各々の会話を弾ませる程だ。

ステイブは女性陣の興味無い所か、嫌つてるとさえ感じる対応に不思議に思う。

(4ヶ月振りの新人なのに盛り上がってんの半分だけだな?てか大半の女性陣が怖い。歓迎どころか睨んできてる気がする。何か?イケメン期待したら俺みたいな普通のなんとも微妙なランクの顔が来て『お呼びじゃねーんだよ』的なの?……かなし……)

テンション落ち気味のまま、フィンに男性陣の席へと案内される。

「仲良くしてやってくれ」

「お手柔らかに」

「勿論すよ団長」

「頼んだよラウル」

フィンはこの平凡を体現した様なラウルにステイブを託すと、元いたヒゲを生やしたチビオヤジと緑髪の綺麗な女性の対面へ戻っていた。

「ラウルさん……で良いですか？」

「そうです。ラウル・ノールド、21歳。ヒューマンで一応これでもレベル4なんすよ。あ、気にしないのでタメ口でいいっす」

「そうか？サンキューな。さっき言ったけど俺はステイブ。歳は18。よろしくな」

ラウルとモブ達に改めて挨拶を済ませると、自分達の分の食い物を分けてくれた。

「今日は冒険者になった、言うなら記念日なんだ。俺らの分もドンドン食ってくれ」

「そうだけ、所属している俺達が言うのもなんだがここの試験は厳しいからな。特に男にはな」

「なんでだ？」

「ロキの趣味だよ。美女、美少女好き」

「ロキのヤロー遠征から帰る度に女性陣に飛び込んで胸やら触るからな」

「……マジで？それじゃまるで変態セクハラ最低野郎じゃねーか。神様に言う言葉じゃねーけど」

「別に大丈夫だよ。実際その通りなんだから」

「完全にエロオヤジさ」

この時ステイブは思った。神だからロキを敬おうと心の内に秘めた思いは早速クーリングオフしよう。

（職権濫用じゃねーか。前世だと完全にアウトだな。大企業の社長が社員にセクハラ三昧なんて。……それにしても……）

「でもやってる事は最低だけど見る目はあるのかな？」

ステイブがそう言うともみんな食事の手を一旦止める。代表でラウルがステイブに聞いた。



「どうしてつすか？」

「いやー、中身は分からないけどみんな顔面偏差値高いよなつて」  
フィンと飯を食ってる大人びた女性や面接に乱入した天真爛漫な少女、金髪の少女等、とても高レベルな軍団だ。それこそ前世のアイドルにも匹敵するレベルだ。

だが、そんな感想を述べたステイブを見て、ラウル達は哀れみの目で見える。

「残念ですがそれは無理です」

「は？」

「こんだけいれば1人位墮とせるかなつて思ってたんだろうけどそれは無理だ」

「ああ、団長がいるからな」

「フィンが？」

「ああ、団長は力、頭脳、性格、ルックス、キャラと5ツールが揃っている。ロキファミリアの女性陣の大半が団長の虜さ」

「獣を恐れて胸の内になってしまうけどな」

「本来ならウィークポイントである低身長も団長にかかればアピールポイントとしてしまう」

「しかも両刀、死角無しだ」

「それなのにお前は大半の女性を敵に回したからな」

「は？なんで？俺そもそも出会ってすら無いし恨まれる筋合いも無いんだけど」

何故か女性陣から恨まれていると教えられたステイブ。それは驚愕の理由だった。

「団長をゲロまみれにするなんて」

「いくら嫉妬している俺達でも出来ないぞ」

「お前は俺らの勇者だその代わり女性陣からの魔王だけどな」

「あ、因みにそっちの趣味は無いから俺を巻き込むなよ」

「自分もです。ノーマルなんで」

「俺も」

「俺も」

ステイプは理解した。試験の出来事がファミリア中に知れ渡っている。それが原因で女性陣に嫌われている。そして男性陣からも勇者と呼ばれている反面、なんか知らないが酷い誤解をされている。あの出来事を見ていたのは3人。そして自分は勿論、フィンが誰かに自分の痴態を暴露する訳が無い。つまり、これを引き起こしたのは1人しかない。

「あんの係員!!!」

## ○女子怖い

ステイブは神室にいた。ロキのベッドにうつ伏せに寝っ転がり、ロキに跨がれている状態で。こうしている目的は1つ、

「それじゃ、正式に契約するでー」

ロキから神の恩恵ファールナを授かろうとしているからである。ファールナは、神血を媒体にして人間の体に神聖文字ヒエログリフを刻む事で発現する。そうする事で神は対象の能力を底上げ出来るのだ。人は見る事は叶わないエクセリア経験値を用いて。簡単に言えばパ○プロや、最近の流行りのウマ女○で考えると分かり易いだろう。溜めた経験値を消費する事で能力を得られる。神がしているのはそれと同じだ。冒険者達が人間らしからぬ強さを誇るの、ファールナのお陰と言っても過言では無い。正に冒険者にとつて大事な儀式、記念すべき瞬間だ。なのに当の本人はというと何やら不満そうな顔をしていた。

「……」ムスー

「なんや？不貞腐れて。そんなにバラされたのが嫌だったんか？」

『モチロンさー！』。だってあの係員の野郎、有る事無い事全てバラしやがったんだぜ！その所為であの扱いさ！大半の女性陣からは養豚場の豚でも見るかのように冷たい目で見られ、残りの少数からは漫画家がリアルな良いネタを見つけた時の様に対象を人では無く資料として見ている目だ！なんだこの扱いは！俺がお前らに何したってんだ！」

「まあまあ、そうカリカリすんなや」

「100歩、100歩譲って吐いたのをバラしたのは目を瞑ってやるよ！元はと言えば俺が原因だしな。許せないけどーでもな、誰がホモじゃい！」

ステイブは荒れていた。ここまで荒れたのは実際に腐を目の当たりにした時の悪寒が原因だった。

「なんで俺がホモになってるんだよ」

この時はまだイライラしているだけだった。男達はいい。ホモ疑惑を誤解と解けたか微妙だったが、だからといって軽蔑して除け者にする気は無さそうだからだ。しかし、女性陣は違う。このままではまともに会話すら出来ない。それどころか陰口を叩かれる毎日が待っているかも知れない。なんて地獄だろう。

「係員、見つけたらただじゃおかねー」

係員への復讐を誓ったその時、

「ちよつと良い？」

10人くらいの女性陣がステイブに詰め寄ってきた。いきなりの事に緊張するステイブ。一旦彼女達を落ち着かせ、そして自分自身も落ち着く。すると、彼女達は自分の入団を祝福してくれた人達だった事に気付いた。前世では揶揄される事はあっても、ここまで真剣に見つめてくれた試しが無いステイブ。これには係員への怒りも吹っ飛ぶほど晴れ晴れした気分だった。

(はは、正にこれこそ樂園パラダイス！こんな可愛い子達が自分に擦り寄ってくる。控えめに言つて最高だ。前世でなし得なかつた事が今、目の前で体験しているのだ！ん？手前の子が片手に手帳、片手にペンを持っている？いや、よく見たらみんなだ。なんだなんだ？そんなに俺の情報を知りたいかあ、まいつちやうなく)

顔がニヤけてだらしなくなつてるのを見た彼女達は首を傾げる。そんな首を傾げる姿も可愛いのだが、いつまでも放置するのは紳士では無い。そんな盛大に勘違いしたステイブは彼女達の為に質問タイムを設けた。

「それじゃ質問ある人は手を挙げて」

すると全員の手が勢い良く上った。この彼女達の探究心が彼をまた勘違いさせる。

「こんな多く、困つちやうなあ。それじゃ……手前のショートカットの子」

「ハイー」

選ばれた子は元気良く返事する。他の子もショートカットの子に遅れは取ったが、一語一句逃さないという覚悟を感じ取れる。そして

遂に最初の質問が彼女の口から発せられる。

「攻めと受け、どちらが好みですか？」

ステイブは思った。『え？いきなり何の質問？』と。他の人達も同意らしく彼女に詰め寄る。

「貴方順序つても知らないの!!？」

「そうよ！もつと他に聞く事あるでしょ！」

「えー!!？これだって初っ端を飾るのに相応しいじゃないですか！」

「全く分かってないわね」

「これだからペーパーは……見てなさい。私が手本を見せてあげる」

「……先月のランキングあたしよりも下だった癖に」

「あゝあゝ？」

「なんでも無いです！」

気を取り直して新人記者に代わってベテラン記者から2投目がくり出された。

「貴方つて両方いける口？」

「え？何を？」

「その何処が初っ端に相応しい質問ですかああああ！」

今度はベテラン記者に非難の声や怒号が鳴り響く。

「あなた！啖呵切つて置いてその質問は何!!？普通は好みの姿からでしょー！」

「でもそんなの聞がなくなつて」

「アンタバカア？」

「だからいつまでも駄目なままなのよ！」

「そんなんだから新人に簡単に追い抜かされるのよ！」

「ぐはっ!!？」

「いい？想像で考えるのと、実際に聞いた声では受ける印象が全然違うのよ！何が好きか！どう好きなのか！何で好きになったのか！なんでもない様な事に感じるけど、それがあるのとないのではその人の一言一言の深みが天と地程の違いがあるのよ！それも忘れてし

まった貴方はもう一回基礎からやり直し、出直して来なさい！」

「う、うう……ハイ」

ベテラン記者は弱々しく返事し、とぼとぼと歩き出す。だが、直ぐに目を拭き取ると新たな涙が溢れない様に上を向いてその場から走り出した。

「見苦しいところを見せたわね。それじゃ取材の続きを……」

「ストップ」

質問タイム改め取材時間を続けようとする先輩記者を静止させるステイープ。最初の質問の時点でもしかしたらと思っていたが今の説教で確信に変わった。これはモテてるのではない、と。

恐ろしく思うも、聞かずにはいられなかった。

「皆さんは……一体なんの話を自分に聞きたいんですか？」

「何って、そんなの当然団長との禁断の関係よ」

「私達同○作家なの。主にBLのね」

「ベテランちゃんにあんな偉そうな事言っただけ、本当は私達だって言えないんだよ。好みは書き出せば分かるけど、結局最後は妄想だもの」

「でも貴方に、ホンモノに出逢えた」

その時の目は印象的で、今後忘れる事は無いだろう。

「あれ程恐ろしい思いをしたのは産まれて初めてだ」

「それは災難やったなあ。でも女と話せたんやしラッキーやろ」

「ラッキーじゃねーよ。あんなのトラウマもんだぞ。女性恐怖症になるレベルだ」

「でも結局は平気なんやろ。そら、そんな事してるうちに出来たで。分かり切った事やけど異常や」

ロキが呆れた顔でステイープに伝えたステイタスとは、こうだった。

ステイープ L V I

力：0

耐久：0

器用：0

敏捷：0

魔力：0

《魔法》

《スキル》

【MINECRAFT】

- ・ 収納可能。
- ・ アイテム作製可能。
- ・ リスポーン可能。
- ・ その他（実行後、解放される）

スキルさえ無ければ普通なのだ。スキルさえ無ければ。

「なんやこのチートスキルは。せめてもの救いな魔法の欄のロットが無いつて事やな」

「ロットとは？」

「ロットとは魔法を覚えられる数や。1つなら1個って感じで最大3個や。そのロットがゼロ、つまりステイブは魔法が使えんって訳や」

「そうか、魔法は無理か」

異世界の醍醐味でもある魔法が覚えられない事に少なからずシヨックを受けるステイブ。しかし、関係ない事だ。そもそも魔法を使う気なんて元から無い。マイクラの能力を持っている事を知ったあの時から、これ1本で生きていくと決めたのだから。

「明日の早朝からフィンとの訓練やる？なら今日は早め寝な」

「そうするわ。サンキューなロキ。これからよろしく」

そう言っつて神室を後にするステイブ。ステイブの戦闘の腕は果たして天才か、凡夫か。

## 焦り

ロキファミアリアはいくつかの訓練場を保有している。訓練場と言っても一つ一つは大したものでは無く、精々1組だけ模擬戦が出来る程度の広さである。

ここはその内の1つ、外に設計されている第三訓練場である。時刻はまだ早朝で小さな物音もよく聞こえる。遠くの『ピーー！ピーー！』という小鳥の鳴き声、『ピッ！ピッ！』という軽快な笛の音、『ポタポタパタ』と閉まりきってない水道の如く汗が地面へ絶えず流れ落ちる音。そして、

「ハア、ハア、ハア…」

「ほら、ペース落ちてる。後10回だから頑張れ」ピッ！

「…の、鬼」

キツイ筋トレで乱れた呼吸音と激励の声だった。乱れた呼吸音の正体が腕をプルプルさせながら必死に腕立てをしているステイブ、リズム良く笛を鳴らしてニコニコしているフィンが激励の正体だ。

何故この2人がここにいるか、それは2時間前の事だ。スヤスヤと快眠をとるステイブだったが、突然誰かに叩き起こされたのだ。その人物はフィンだった。外を見るとまだ太陽も登ってない時刻。ステイブは『こんな時間にいきなりなんだ』と訊ねると、フィンは『早朝のトレーニングを始める。10分で支度して第三訓練場に来て』と言いつつその場を後にする。ステイブはギリギリまで布団に包まうも、きつかり10分後にフィンの前に姿を表す。

初めは軽いジョギングと準備体操だった。だが、準備体操が終わるなり地獄の筋トレが始まった。メジャーな筋トレから、マイナーな筋トレまで様々な筋トレがある。それこそなんで異世界にこれがあるの？と思うくらいに。そして最後は一周5kmある外壁の上を2周して終了と、とてもヘビーなトレーニングメニューとなっている。

腕立てはセミアイナルトレーニングだ。回数は50回。これだけなら運動部未所属だが、学校の授業で体育が1番好きだったステイブにとってもキツイがギリ熟せるレベルの筋トレだった。だ



が既に数々の筋トレで疲労している体。全身がプルプルが止まらない。だが地獄の筋トレは人を乗せて行こう。今回は勿論フィンだ。いくら彼が小人族バルウムで体重も軽いからって人を乗せて50回の腕立て伏せ、それも運動部でも無い帰宅部には鬼の所業だ。しかも人を乗せるのは何も腕立てに限った事では無い。今までやったスクワット等の筋トレもフィンと言う名の重りがあった。それでも、ギリギリでも、本当にボロボロでも熟せているのは神ファルナの恩恵のお陰だろう。神ファルナの恩恵を授かるだけだが、それだけで僅かなりとも冒険者の肉体に変化したのだ。

「ラストー！」

「ぐっ!!?.....ラ.....ス.....ト.....!!?」

ピッ!

「はい、50回終了。腕立てお疲れ様」

50回を、そして全ての筋トレをやり切る事に成功したステイブ。後はラストのランニングだけ。その気の緩みが体全体を支えていた腕の力をゼロにしてしまった。フィンがまだ乗っているのに.....

「お、.....終わった」スッ

「あつ」

「グエ!?.....」

ただでさえ自由落下するステイブの背中を、フィンの体重が加速させた結果、ステイブは腹を強打してしまった。

「大丈夫かい?.....」

フィンが声をかけるが返事が無い。ただの屍のようだ。今ので気を失ったのか?否だ。実際には気絶したフリだ。その間に最後のランニングの為に少しでも体力回復を図っているのだ。だがそんな安易な策がバレない訳が無く、フィンは仕上げに取り掛かろうとしている。

「腕立て、そして全ての筋トレお疲れ様。じゃあラスト、ランニングとしようか。最初の1周は普通に、ラスト1周は僕を背負ってね」

「ちよっ!??タンマー！」

全く休憩をくれない鬼コーチに驚きを隠せない。こんなの前世なら完全に行き過ぎた指導で問題になるだろう……知らないが。

「一回休憩させて!??ほら!見てみ俺の体。全身プルプルしてる!もうげんかいですって言ってるよ!」

「でもこのペースだと朝食に遅れるよ」

「そんなの分かってるよ!俺が1番お腹空いてるもんっ!でも5分だけで良いから!俺さ、ここまで頑張って来たじゃん!休ませてよ!」

涙目で休憩を懇願するステイブに、ここまで頑張っついて来れたご褒美をあげる事にした。

「分かったよ。でも本当に朝食まで間に合わなくなるから3分だけ」

「サンキュー!はあー」

貰えた時間は少なかったが休憩を貰えた事に本気で感謝するステイブ。肉体を地面に預け、大の字に寝っ転がって息を整える。その際に疲労した部分をマッサージするのを忘れずに。そんなステイブをフィンは横目で見る。

(リスポーンか)

~~~~~

あれは昨日の夜だった。

「ロキ、入るよ」

丁度ステイブのトレーニングメニューを決め終わった時だ。ロキに神室に来るよう言われたのだ。

「おお!来たか。入ってええで」

「なんだいロキ?急に呼び出して」

ロキに催促され、部屋の中に入る。その時のロキは、いつものふざけた表情は保ちつつも、何か複雑な表情をしていた。そもそもこの時間に呼び出された時点で何かしらあったのは明白。その何かは一体何なのか?

「一応団長であるフィンには言っておきたくてな」  
「何を？」

「ステイブのステイタスの事や。普通は同ファミリアでも教えるべきやないんやが、今回は特殊でな」

「ロキ…ステイブが特殊なのは元からだよ」

「いや、そうやなくて」

冗談を挟んだ後、1度深呼吸をしてステイブの特殊話に臨む。

「それで、具体的に何があった？」

「スキルが1つやったんや」

「…どう言う事だ？収納とアイテム作製の有無は君が証明したじゃ無いか」

ロキの矛盾の発言に返すまで少しの間が空いた。何故ならロキのこの発言は、ここだけ聞けば神が嘘を見分ける事が出来なかったと言っているようなものだから。ロキも直ぐに訳を説明する。

「違かったんや。あの2つの能力は『Mining Craft』ちゅうスキルの数ある能力の1つに過ぎ無かつたん」

それからロキはスキル『Mining Craft』について分かっている事を説明していく。

1つ、全ての能力を完全に把握出来ない事

1つ、まだ現れていない能力が存在する

1つ、まだ見えない能力はステイブが実行した後解放される  
そして、

「3つ目の能力が既に解放されてるんや。能力の名前は『リスポーン』」

『リスポーン』!?？」

「シート」

『リスポーン』という単語を聞くと今まで以上に反応を示す。でもこれはファミリアのメンバーにも聞かれたく無い話。興奮したフィンをロキが落ち着かせる。

「フィン、声がデカいで。落ち着きい」

「ごめん、つい。でも『リスポーン』って、あの時ステイブは確か

に…」

「分かつとる。あの時の言葉に嘘はあらへん。やからウチはこの『リスポーン』がウチらの知つとる『リスポーン』と違うんや無いかと思ふとる。ステイープの『リスポーン』はスキルやなく、あくまで『Minecraft』<sup>マインクラフト</sup>ってスキルの能力やから」

「…可能性は無くは無いね。でもそうじゃない可能性もある。で、当の本人はこれを見てなんて？」

「なんも言わんかったわ。少し驚いた表情をただけや。魔法スロットについての知識は無く、魔法使えんと分かった時は少し落ち込んだけどな」

「なら、ある程度スキルについて知ってるだろうね」

「やな…」

ステイープは自身のまだ隠された能力を知っている可能性がある。フィンはそれを今にでもステイープに聞き出そうと考える。彼の秘めた能力を、もっと知りたい。そして更なる未開拓領域へ、そう考えていたフィンをロキがいつの間にか立ち上がり、そして抱きしめた。た。

「ロキ？」

突然の抱擁にフィンは同様に隠せない。

「フィン、ステイープの事、どう思つとるんや？」

いきなり何の質問だ？と思うフィン。しかし、この次のロキの一言で自分がやらかしていた事に気付く。

「ステイープの事、道具と思つて無い？」

「!?？」

そこには極東の一部の方言を話してふざけていた面影は無く、誰もを包み込む聖女にしか見えなかった。

「最近遠征で上手く行つてなくて焦る気持ちは分かるわ。でもだからって新人を使える使えないで判断するのはダメだよ。それじゃ闇派閥の考えと変わらない。フィンにはそうなって欲しくないなあ私は」

「ロキ……」

フィンは思い出していた。まだロキの眷属になって間もない頃、死にかけて程無茶した時に今と同じ様に優しく抱きしめられていた事を。ただ昔も今も変わらず柔らかさはゼロに等しかった。

「だからね、あまりステイブの事を詮索しないであげない？」

「？それはなんで？」

「確かにあの子の能力は魅力的よ。だからってそれだけで見てはダメ。能力だってあの子の魅力の1部に過ぎないわ。私はね、あの能力が無しでも魅力的な子だと思うわ。まだ私の勘だけどね」

「そうかなあ」

「そうよ。確かに色々あったかも知れないけど元々彼に目をつけてたからなのはなんで？能力が凄いから？見た目が印象的だから？違うでしょ。見た目は凄かったけど、それ以上に何かしてくれるって期待感があったからでしょ。その勘を信じてみようよ」

~~~~~

（冒険者に成り立てにはかなりキツイメニューにしたつもりだけどなんだかんだ投げ出さないな。筋力量はそれなりにあるな。根性もある。後は戦闘はどれ程のものなのか。……確かに焦ってたのかも知れないな僕は。いつまで経っても英雄の亡霊を超えられない事に）  
ステイブにおんぶされながらそんな事を考えていた。いつまで経っても脳裏にチラつく英雄達。彼等が邪魔で邪魔で仕方無かった。速く彼等を超えて頭から振り払ってやりたい。そんな気持ち焦りを生んでしまったと。

（まだステイブが何を成し遂げてくれるか分からない。でも1人と1神にこんなに期待されてるんだ。何も出来ません出したじや許さないぞ）

勉強って聞くだけで頭痛くなる

「コラッ！しつかりと聞かんかっ！馬鹿者！」パンツ！

「ぐしゃ!?？」

午前の内に冒険者登録を済ましたステイブは、まだレベル1の先輩冒険者達と共にリヴェリアのダンジョン攻略講座を受けていた。彼等はいち早くロキファミアの遠征に加わり、自分達が憧れた者達の一員になる為、真摯に授業を受けていた。しかし、ステイブはと言うと開始30分で姿勢こそ良いが、彼の表情を見れば退屈そうにしてるのは明らかだった。そんな不真面目な態度で聞く彼を、リヴェリアは彼女特製の『ダンジョン攻略ブック』で怒りの鉄槌を喰らわしたのだった。

「何すんですか！今『ぐしゃ！』て言いましたよ！」

「それは貴様の声だ」パンツ！

叩かれたステイブは自分の行いを反省する素振りも見せず、涙目になりながら彼女に文句を言い、自分の頭が無事か擦って確認する。そんなステイブを見てイラツとした彼女はもう1発怒りの鉄槌をお見舞いする。今度は先程よりも大きな音が鳴った。また頭を押さえるステイブは叩かれた箇所を押さえながらあの台詞を言い放つ。

「2度もぶった、親父にもぶたれた事無いのに！」

しかし、ここは異世界。そんな台詞が通用する筈も無く、

「黙れ。真面目に聞かない貴様が悪い。そもそも、この内容は他の者は既に終えている内容だ。復習と称してわざわざ右も左も分からないお前の為に時間を教えているのだ。聞く気が無いなら今すぐここから出て行け」

リヴェリアの言葉に皆頷く。彼等が領いたのは、なにも自分達の時間を奪われているからだけでは無い。ステイブが彼女の優しさを蔑ろにしているからだ。

リヴェリアは今朝の内に講義に参加する生徒達を集めて許可を取っていたのだ。それも復習という名目にする事でステイブが心置きなく集中出来るように。そんな彼女の優しさを、彼は……。誰も

が彼に非難の目で見る。普通ならこの視線に居た堪れなくなり、直ぐに謝り心を入れ替えて真面目に受けるのだろうか、そこら辺は異端児。

「なら失礼します。先輩頑張ってくださいね〜」

「なっ!?」

まさかの自主退室だ。スキップしながら部屋を後にするステイブにリヴェリアは呆れて口を開けたまま数秒固まってしまった。生徒達は尊敬しているリヴェリアにあんな失礼極まりない態度を取るステイブに怒りを露わにする。

「なんなのあいつ!」

「舐めやがって!」

「袋にしてリヴェリア様の前に差し出して土下座させてやる!」

次々と席を立ち、彼の後を追う生徒達。だが、それを叱るリヴェリアア。

「止せ!直ぐに座れ。講義を再開する」

「でもっ!」

「奴に怒るのも時間の無駄だ。時間は有限なのだ。先に戻れ」

生徒達は彼女が言うならと先に戻り、講義を再開したのだ。

「ふあ〜」

講義を抜け出したステイブは頭の後ろで手を組み欠伸をしていた。そんなステイブを呼び止める者が1人。

「何やってるんだい?」

「あ……」

フィンだった。普段より笑顔なのが逆に怖い。あまりの不気味さに数秒固まったステイブだったが、振り返って全速力で逃げ出すとする。だが悲しきかな、身体能力が違いすぎた。

「はい、捕まえた」

「ヴェ!?速過ぎだろ!まだ1秒も経ってないぞ!」

「君、今はまだリヴェリアの講義中の筈だよね?なんでここにいるの?」

「実は……」

くくく

経緯を説明したステイブは問答無用で正座させられていた。

「なんでちゃんと受けない。君の為にやってるんだぞ」

「……………」

フィンの問いに無言で返す。彼から厳しい目を向けられる。勝手が過ぎる行動だからだ。だが、それでもステイブは無言を貫く。例え何分何時間続けられようと貫くつもりだった。話す気はないと察したフィンはステイブを引きずってある場所へ向かう。

それは地下へ向かう階段の最深にある反省室だった。足元にあるご飯を支給出来る程度の大きさと、最低限の明かりが差し込む為の鉄格子付きの小窓。それ以外は頑丈な鉄壁で覆われた小さな個室。

「まるで独房だ」

「今から君の部屋だ」

「え？うわあ!?!?」

フィンはそのステイブを押し込み、鍵を掛ける。ステイブは鉄格子を握りしめてフィンを睨む。

「何すんだよ!」

「安心していいよ。餓死させる気は無い。3食しっかり出す。その代わり、このまま理由も話さず謝罪もする気が無いのならそこから出す気は無い。勿論ダンジョンにも行けない」

「いくらなんでもやり過ぎだろ!」

「君には丁度良い薬だろ。気が変わったら食事提供する時に訳を話してくれ」

「おい!待てよ!フィン!」

フィンは叫ぶステイブを無視して地下を後にした。彼の身勝手さは非常に危険だ。彼一人の為に全滅しかねない。子供じゃ無いんだ。『ダメ』ですむ話じゃないのだ。少々荒っぽいのが今のうちに矯正する。



（明日の朝には反省して自分から理由を話すだろう。大方勉強が嫌いとかだろう。彼もそれくらいは分かると思うが）

戦闘は情報がものを言う。例え技量は下でも情報戦で勝っていたら相手に何もさせずに勝利する事も可能。逆もまた然り。それだけ情報というのは重要なのだ。

（全く、彼のいい加減さには骨が折れるよ）

その数時間後、反省室からステイプが姿を消した報告を受けたフインは持っていたペンを握りつぶした。

日にち空けてから投稿すると高確率で低評価食らうよね

「団長！大変です！」

それは夕食の時間だった。ステイブの元に夕飯を届けに行つた一般団員が、肩で息をしながら戻つて来た。彼の表情を見るまでも無く、声を聞けば問題が発生したと察知するのは容易だった。

「だんちよ!??ゴホツ!!?ゴホツ!!?」

彼はフィンの目の前まで来るといち早く報を知らせようとするが、ここまで全速力で走つた故に息が乱れて咳き込む。一呼吸ごとに肩が大きく上下している。フィンはそんな彼を一旦その場に座らせ、呼吸を整えさせる。

「まずは落ち着け。話は呼吸を整えた後だ」

「ハアハア、ハア……んっ、もう大丈夫です。ありがとうございます。それより団長！ステイブが、ステイブが！」

「落ち着くんのだ。ステイブがどうした？何があつた？」

息は整えても落ち着きは戻らない。それもしようがないだろう。何故なら、

「ステイブが、ステイブが姿を消しました！」

「「「「「!?!?」」」」」」

そんなこと行動を取るなんて予測もしなかつたし、そんな芸当が出るなんて思いにもよらないかつたからだ。

ステイブの取つた行動はあの時彼と同じく講義を受けていた者達によつて既に周知の事実となつている。勿論、その後に反省室に入られた事も含めて。だから殆どの者が同じ事を思った。『バカなレベルに反省室から脱走なんて出来る訳が無い!?』と。反省室と言う名だけあり、扉もそれなりに強固に作られている。その扉をぶち壊して脱走<sup>逃げる</sup>なんて芸当、第1級冒険者ならいざ知らず、先日冒険者になつたばかりの者に出来る訳が無い。

フィンにとつてもこの事態は完全に想定外だった。まさかこんな

行動を取るなんて。思わず次の遠征の作戦会議を書き記す為に持っていた愛用の万年筆を『グシャツ』と、握りつぶす程動揺していた。フィンはこの報を受けると直ぐ様彼を抱き抱えて反省室へと駆け出した。この時腐の者から歓声が湧いたが場に走る緊張した雰囲気を守る為、彼女達の会話は伏せておく。

「団長！」

「お前達はそのまま美味しい夕食を楽しんでくれ」

「待てフィン！」

3人も彼の後を追う。フィン等は彼等にそう言い残し、急いで現場へと向かった。ガレス達

フィン達が立ち去った後の食堂には静寂が待っていた。フィンに食事を続けろと言われても、何事も無かった様に食事を再開出来る者は誰一人としていない。ステイーブ1人なら何事も無かった様に食事を再開させるだろう。例えこの後、彼に最悪が降り注ぐと。仲間意識が強いロキファミリアと言っても、それは友情を育んだからだ。先日入団して来たばかりで、不祥事も起こしている彼がどうなるうが気にも留めない。しかし、自分達の上司達が1人の団員の為に行動を起こした、その事実が彼等を縛り上げている。

「チツ…」

たった一回の舌打ちで大衆の視線を集める狼<sup>ウエアウルフ</sup>人の青年。彼の名はベート・ローガ。レベル5の第1級冒険者にして、

凶狼</rb></rp></></rp></></rp></rt>>ヴァナルガンド</rt></rp></></rp></></rp></></ruby>の二つ名を持つ。ファミリア最速である彼の脚力から繰り出される蹴り技は深層のモンスタードラゴと頭蓋骨を砕き割る威力を誇る。ただ、口が究極的に悪く、いつも相手を貶す言い方をしている為、一部の人を除き、ファミリア内の人物からも怖がられている。

ps、最近ある事で悩んでいる。

「雑魚が、調子乗って粋がったんじゃねーよ。……………食欲失せたじゃねーか」

そう言ったベートは今日の主菜である焼き魚に手も付けずに食事を切り上げて食堂を後にした。彼のこの行動が余計に彼等を縛り上げる。自分達だけ呑気に食事を取って良いのだろうか?と。

「あの、すいません」

彼等の前に1人のピンク髪の女性が現れたのはその直後だった。

牢屋に辿り着いた2人。既にフィンは一般団員を降ろしている。

「自分が食事を待つて来た時には既にもぬけの殻でした。…つて団長何やってるんですか?」

「静かに」

フィンは彼をよそに部屋の壁を手の甲の第二関節で小突き始めた。彼はその行為が何の意味を持つかわからないが、フィンの邪魔をせぬ様にする。静かになった部屋には足音と同じコンツという音だけが鳴り響く、かと思われた。

カンツ!

普段は鳴ら無い高い音、まるで向こうに空間が広がってる様だった。フィンはその場所を横蹴りで破壊。ボロボロと崩れ落ちる向こう側には10数m続く道が、そして突き当たりには上へと続く階段が存在していた。初めて見た空間に一般団員は驚きを隠せない。

「団長、こんな空間があったんですか?」

「違う、これはステイブが作り出した逃走経路だ」

完全にやられた。ステイブの収納の能力(厳密には違う)なら壁を壊す事が可能なのは分かっていた。それでも実行に移すとは予想外。

「団長!」

そこにリヴェリアとガレス、そしてティオナの姉であるティオネがいた。彼女達も見ただ事ない空間に驚いている。

「団長、これは?」

「ステイブが脱走する為に掘った穴だよ」

フィンが発言に、

「嘘ッ!?？」

ティオネは驚き、

「ハハハッ！今回の新人は随分と活発じゃのお！」

ガレスは高笑いを上げ

「ガレスよ、呑気な事言つとる場合か。今奴が何処にいるかも分からぬのだぞ」

リヴェリアはステイブの身を案じていた。そんな彼女にフィンは告げる。

「いや、彼の行き先は恐らく……」

「団長！」

フィンの言葉を遮る声、それは他の4人以外から発せられた声だった。一同が声のする方に振り向くと一般団員（女）と、ロキファミリアと交流があるギルド職員、ミイシャ・フロットが立っていた。彼女が何故ここにいる理由は1つ。

「ステイブ氏がダンジョンへ出かける姿を見かけたのですがご存知ですか？」

「「何ッ!?？」」

「やっぱり……」

ミイシャのお陰でステイブの行方が分かったフィン達。彼等は急いでダンジョンへと急ぐ。そして彼等以外にもステイブを探る謎の影。その者の正体は一体!?？そして当の本人はと言うと現在ゴブリンの対峙中であった。

「俺の記念すべき一戦だ。呆気なく終わってくれるなよ」

つと、何処からその自信が出るのかと問いたい一言。だが、彼には重大な問題を抱えていた。彼の行方は如何に。